



震災から半年

荒川 輝男

この機関紙が皆様のお手元に届くころには、東日本大震災から半年が経過しています。現地では、まだまだ復興の方向性が見えない状況ということに変わりはないけれども、新たな課題の中で被災された方々の生活がスタートし出している。

震災の発生時にそうそうの杜が社会福祉法人としてできること、やらねばならない事を確認したことは

1. 東日本の遠くの出来事ではなく、我々自身のこととして復興にできる事を考え実行していくこと。
2. とにかくにも震災復興については被災地へ行くこと。スタッフを派遣すること。
3. 募金や支援金を送ること。
4. 城東区を中心に障害者支援を生業としている我々自身のところで地震が発生した場合を想定して対策を講じること。

この 4 点を実行に移していくことで受け身の復興支援ではなく我々自身の意志として、また法人の役割を創っていくことにした。

復興支援の派遣については、ゆめ風基金を窓口にして被災地障害者センターみやぎ（C I L たすけっと）の元で活動してきた。

スタッフの派遣については、第 1 期が 4 月 14 日から 6 月 29 日まで 18 人、延べ日数 147 日間。第 2 期は 7 月 19 日から 9 月末まで 21 人延べ日数 155 日間（その他高校生 3 人、小学生 1 人のべ 23 日）を予定している。派遣の基本パターンとしては、一人が 8 日間 2 日は移動になるので実質 6 日間で次の要員と 4 日ずつダブらせて切れ目がないようにしている。

第1期（4月14日～6月29日）

前回の報告で述べたように、震災後1か月を経過した段階で混乱した状況の中での活動開始だったので、我々自身も何をして良いかわからず、避難所を廻り障害のある人のニーズの掘り起こしを中心に行った。また被災地障害者センターみやぎの献身的な活動に少しでも役に立てるようにとの思いがあった。

後半になると、被災された方々も避難所での生活が定着してきての新たな課題と徐々に仮設への移転が開始され中での課題などが交錯する中で、避難所や仮設住宅を回っても様々なボランティア団体が調査と称し入ってくる中で我々に対する眼も厳しいものが出てきたりしてきた。この時期に、ゆめ風基金で南三陸町の内陸部にある登米市の拠点が設置されることになった。

この段階で、我々自身の活動の目的の見直しを図り、ゆめ風基金や被災地障害者センターみやぎにご理解を頂き登米の拠点を中心に活動を再開することになった。この登米拠点にゆめ風基金から現地の方を採用しコーディネートをして頂いているので地道な活動につなげていけるようになってきている。

第2期（7月19日～9月30日）

今号は、この活動の経過を中心に報告したいと思います。今回の派遣については登米拠点の活動状況から人手が必要との判断で社会福祉法人加島友愛会も合流して一緒に活動をお願いしている。また当初から継続して大阪市従業員組合も活動しておられるので登米拠点での活動は6～7人体制で行っている。

時間の経過とともに、我々にとっては震災当時の悲慘さが風化していくが、被災された方々は、いまだに今後の生活の見通しが立たない状況であり、悲しさや苦しみ等にじかに接する中で、社会福祉法人そうそうの杜としてできることは何もないかもしれないが、今後も継続的に支援していくことだけが役割として続けていきたい。

今号は、震災特集第2弾としてお送りします。*****

今回は、被災地障害者センターみやぎの県北支部（登米拠点）の常駐スタッフとして活動されている小野寺ふさ江さんに寄稿していただきました。

この原稿をいただいて読んでいるうちに、涙が止まりませんでした。小野寺さんに大変に無理なお願いをしてしまったことを大変申し訳なく思いました。被災された方しか表現できないこと。またこの行間にこめられた様々な思いは簡単に文章では表すことのできないものが一杯詰まっているような気がします。

また、派遣したスタッフの感想と日ごとの報告書をセットで構成しています。

更に、最後の方は現在法人で関わっている高校生の感想を入れています。
マスコミ等での報道では見れないものを現地から感じて取って帰ってきました。

法人としては、9月末で2期の活動を終了し、10月半ばから3期目の活動に入ります。

《 3. 11 あの日あのとき 》

被災地障がい者センターみやぎ
県北（登米）支部 小野寺ふさ江

私が住んでいる南三陸町は人口 1 万 5 千人の小さな田舎町でしたが、何より海が自慢で海の幸の宝庫でした。その海が、あの日 あのとき・・・。

3 月 11 日金曜日 14 時 46 分 地面から突き上げられるように建物がジャンプしたと思ったら尋常でない揺れが始まった。私の職場（シャディギフトショップ）は店内の商品や什器が倒れポスレジが飛び恐怖を感じ店外に出たもののマンホールの蓋は 3、40 cm ほどジャンプし、揺れはますます激しく私は地面に伏したまま揺れが収まるのをひたすら祈っていた。4、5 分ほど続いただろうか。

揺れが収まると店内の事はさて置き、自転車を借り自宅まで直行。我が家の被害はスノーマンのミニ火鉢が落ちただけで、父が大被害だと笑いながら火鉢を元に戻していた。両親の安否と我が家の無事を確認し職場に戻ると目の前の国道は指定避難場所の 1 つであるベイサイドアリーナに向かう車で渋滞していた。町の防災無線でも津波の襲来を伝えていた。程なく社長が自宅よりご両親と弟を連れ避難してきた。

店の中は社長一家 6 人と私の 7 人でワイワイ賑やかにお喋りしていたが、何となく外の様子が気になり店外に出てみると、防災無線は 6 m の津波から 10 m の津波が・・・と言ったまま途絶え、遥か海側の街は黄色い煙が広がっていた。店の奥さんと黄色い煙は何？ 10 m の・・・って？と疑問に思っていたが寒さで店内に戻ってしまった。店内で二言三言会話し、やはり外が気になり店外に出て社長の息子と街の方角を眺めていたら突然「来たぞー！逃げろ！！津波だ！！！」と社長の弟が走って来た。

その声の方向を見ると、既に川から波が押し寄せ、波の音、建物が壊れる音、プロパンガスが漏れてる音が一気に襲ってきた。思わず社長の息子に「走れ！！」と二人で波と逆方向に走り、走りながら社長の弟が店内に入るのを確認し、これで社長達は大丈夫と思い、必死に走った。社長の息子は遥か前方、このままでは波にのまれてしまう・・・目の前の建物の裏側に階段があることを思い出し上ってみた。ここは大丈夫かとも思い立ち止まり店の方角に振り返ると店が津波と流されてきた建物に倒され、一瞬にして消えてしまった。社長、奥さん・・・呆然としながら我が身にも波が押し寄せてきた。高いところ高いところと、とにかく高いところを目指し駆け上り、気付けば杉山に登っていた。もう大丈夫？？と思った途端腰が抜けた。

何とか気持ちを落ち着かせ下におりると目の前は建物、車、船等のガレキの山・・・あっ！社長達は？店の方に近い場所に移動してみるとどこからともなく「たすけて～！！」と声だけが響く。耳を澄ますと「翔太～翔太～！！！」と社長が息子の名前を叫んでいる声が聞こえた。あっ！社長生きていたんだ！！と思ったが程なくその声は途切れ、別な方

が助けを求める声だけが続いていた。助けたくても助けられないもどかしさ。心の中でどれだけゴメンなさいと言っただろうか・・・。

どれぐらい時間が経っただろうか。ようやく消防の救助が来た。自分の目の前に起きた出来事しか知らなかったが、街は全滅したとのこと。意味が分からなかった私は家に帰ろうと思っていたが、ガレキで断念し、近くにあるベイサイドアリーナへ向かう。

ベイサイドアリーナにはかなりの人が避難していた。知っている人の顔を見て大丈夫だった！？と皆涙を流していた。私はまだ、どうやったら家に帰れるか考えていると目の前に母がご近所さんと現れた。「なんで来たの」の問いに母は「家流された」ショックだった・・・。

あれ？父は？ 母の実家に足の悪い姉がいるので、母の兄と供に向かったようだ。私は、母の実家に行く道のは高台が多いし、山伝いでアリーナまで来れると思っていたので、ここで父の帰りを待つことにした。ベイサイドアリーナの体育館や小ホールは余震に備え立ち入り禁止。避難民はアリーナの通路で夜を過ごす事になる。独りぼっちになった社長の子、翔太君と夜が明けるのを待った。翔太君は、自閉とアスペルガーを持っているので、人の空気を読むのが苦手な為、大勢の中では浮いている。が、懸命に生きようとしている姿はとても痛々しい。

翌日、諦めたとぼつり話してくれた。諦めたとは両親、祖父母、叔父がもう生きていないと。かたや私はまだ父が帰って来ると思っている。この日は母と私は母の一番上の姉の所に避難しようと思っていた。が、各方面から救助に来た方々の話から伯母の所まで津波が行った事を知った。

3日目、叔父が私達を探しに来てくれた。私達の姿を確認するとお互い号泣した。叔父も津波にのまれたが生き延びた事、伯父と父、伯母二人が行方不明を確認し他は皆無事だった事を知る。そして、始めて気付いたことがある。震災当日持っていた鞆（現金8万と通帳カード印鑑等）一式と車が店ごとながされた事。悔しい・・・。でも、人の命が何より大事。皆が元気でいればそれでいい。

私たちの町は津波により道路、電気、水道等ライフラインが全て無くなった為お手上げ状態に。幸い、全国、各国からのご支援により、何とか今日まで生きてこられたと思っています。

ありがとう！の言葉をどれほど使ったのでしょうか。本当に感謝感謝の日々でもありました。津波は辛く悲しい出来事で、思い出したくないことですが皆様からの暖かい善意は決して忘れる事は出来ないし、忘れてはいけない事だと思っています。

家族や友達、仲間が、平凡な日常がどれほど大切な事が、今さらながら実感しています。震災から半年経ちますが、未だ父は帰ってきません。父だけでなく、伯父、伯母、社長一家、友人知人が行方不明のままです。生きていなくても必ず帰ってくると信じ、待ち続けるつもりです。私たちのような災害は今後起きないように、起きても被害が最小限に抑えられますように。と念じてやみません。

5月に入ってすぐの被災地訪問では涙を流すことさえはばかれ、被災された人たちとの隔たりを超えて何をすればいいのか、その手掛かりさえつかめない最初の訪問だった。宮城からこちらの日常世界に帰ってきてやっと、この苦しみと悲しみを少しずつ表現することがようやくできた。

そして7月初め、第2期の被災地支援活動開始の準備のために再度訪問。

がれきの山はなくなり、そこには何もなかったように雑草がすくすくと伸びていた。津波ですべてが流され、そして次はがれきの撤去で、過去という日常が跡形もなく流された土地を見て、本当に全ての人の営みや想いがなくなったのだと改めて現実感を伴った悲しみに揺さぶられる。何事もなかったように伸びる雑草が恨めしく、そして、何事もなかったような変わらない自然の力強さを見て、絶望と希望はこういう風に時間をかけて少しずつ、でも確実に変わって進んでいくことができるのかかもしれないと思えた。それでも空っぽの心でどうやって立っていけばいいのか、その勇気を持つことの怖さを前に涙を流してもいいのだと思えた。ようやく被災された人たちとの隔たりが少しだけ縮んだような気がした。

そして社会福祉という仕事に携わっている私たちがやらなければいけないことは何かを改めて振り返ると、障害のある人もない人も同じように幸せになるために地域を作っていくことが使命ならば、地域の人たちがその力を持てる日まで、寄り添っていくことができないか、それが隔たりを超える手がかりとなるのではないかと考えた。

初めの被災地支援に行ったそうそうの杜のスタッフ全員で出した答えも、「外から障害のある人の状況は見えない。」「ひとつでもいいから地域に入って、居続けることでしか本当に必要な支援は見えない。」「これで終わりにすることはできない。」などの言葉から、支援活動を続けていきたいというものであった。私の立場からできることは何か、それはこれを確実に実現していくこと。それが私たちの被災地支援なのだと思う。そしてこのように考えてくれる人たちと日々の支援にたずさわれていることを誇りに思う。

第2期の被災地支援でそれぞれのスタッフが、被災者の語るに語れない言葉を待つこと、聞くことその難しさ、そしてそれが語られた時の重さと計り知れない悲しみをしっかり受け止めていくことの大切さを感じている。また障害のある人たちの状況の地域性の違いを理解し、被災した方たちがこれからどのように生きていくのかは、地域の人達が地域性を大事にしながら、被災した人たちの気持ちのペースに合わせてこれからを作っていくことが大事なのだと実感している。これこそが日々私たちが目指している支援なのだという事に気が付き始めている。

このことは南三陸で震災後すぐにボランティア活動されているつつみさんをはじめ、小野寺さんや皆さんとの出会いがなければ感じることはできなかったであろう。そしてこうした活動ができるのもゆめ風基金の活動が存在していたからであり、何よりも

仙台市であの日からずっと支援をし続けている「C I Lたすけっと」の皆さんのご尽力のもと、全ての出会いを生み、私たち皆がその出会いに心から感謝している。そして出会わせていただいている被災地の皆様に心から感謝の気持ちを伝えたい。



I.活動期間①（H23.6.17～6.24）の感想

1.宮城県および東北地方の地域性

障害福祉サービスや移動支援を利用することなく生活してきた人が多い。家族や親戚等の身内の支援で障害のある人の生活が殆ど事足りてしまうのだろう。また、聞き取り調査の中で「他の人の手を煩わせたくない・・・」「他の人の手を借りたくない・・・」「迷惑をかけたくない・・・」「私たちの責任だから・・・」という感情が根付いているように感じた。では、家庭での生活が困難な医療的介護の必要な人や重度の行動障害のある人はどうしているのか。答えは大きな法人が地域の社会福祉協議会と連携しながら運営する山の中の障害者支援施設や事業所と繋がっている。根本的には「障害のある人を隠す」という風土が未だに残っている地域であり障害福祉サービス利用率の低さや制度・資源の利用方法が知られていないという現状に表れている。

そのような地域の中で偶然にもそうそうの杜と同じ様な「地域の中での生活を支援する」という理念を掲げる NPO 法人に出会う事が出来た事は嬉しく思えた。5 事業所のうち 3 事業所が被災しかろうじて残っている事業所を有効に活用し地域の方々の憩いの場として機能していた。また、周囲の仮設住宅の掲示板には物資配布のビラも張り出し活発に活動している。JDF との関わりやメディアへの露出等利用できる方法はどんどん活用している。

2.被災者・避難所・仮設住宅

東日本大震災から 3 カ月を経て未だに生活状況の変わらない人たちが数多くいる事にやるせない感情と自分にできる事は無いかという気持ちがわきあがって来た。決して清潔とはいえない体育館の中でプライバシーの無い生活が続く事は想像し難い。避難所によっても物資の提供が豊かであるのか避難所内にテントが配布され家族単位で使用している。しかし段ボールの仕切りでスペースを区切っている所がほとんどであった。現在も避難所に残る多くの人たちは避難所を出て仮設住宅に移ると生活できない。仮設住居への移行は自立であるからである。行政としては自立した人たちへの物資の配給はできないとの事。「前例を作ることはできない」とは言うものの切り捨てるだけでは阪神淡路大震災の仮設住宅での教訓が生かされていない。中越地震での仮設住宅への入居プロセスはそれなりに考慮されていたように記憶しているが地震の規模、被害の大きさ、行政が機能していない現状を考えれば仕方がないとも感じる。県が市町村レベルの行政機能を代替する事も困難だろう。地域の有力者が行政との交渉で健康的に且つベターな方向性を見出して行くのかなと予想する。

3.被災地障害者センターみやぎの活動

障害のある人のニーズをピンポイントで探し出し障害のある人に対する支援に特化した活動としては評価に値するし今後も必要であると感じる。東北地方という地域性を考えれば被災した障害のある人やその家族は限界まで我慢し「なんとか自分たちの力で・・・」「他人の力を借りずに済ませたい・・・」という意識があるように感じる。したがって個別ニーズに関しては全て当事者からの連絡待ちでありその中で出会った人たちの口コミをお願いする事がその他の障害のある人にたどり着く有効な方法だと感じた。

被災地には数多くの様々な団体が支援活動を行っている。各団体がそれぞれの思惑で利権にも絡みつきながら活動している節もある。しかし、そのような中で情報を共有し「災害支援」という大きな観点から必要な情報を整理できるような存在の必要性を感じた。地域の行政にその力は無く、現在活動しているボランティア個人の力量で各チームがそれぞれ考えながらニーズに対応しているように感じる。

行政と地域の福祉関係者や有力者、障害のある人やその家族をそれぞれ引き合わせ、繋ぎとめ見通しの立つ支援を継続させる事は非常に難しい。1つの事業所にすべてを任せて後は知らない・・・では論外である。また、どこから来たのかいつまでいるのかわからない人間がその役割を担うことにも疑問がある。長期間活動するボランティアであっても所詮はボランティアであり、どんなに有能であってもその人が抜けた場合の代わりはすぐにできるものではない。ボランティアにその役割を求める事は長期的な支援を必要とする被災地では不可能である。「CIL たすけっと」のスタッフが地域性を生かしたコーディネート力を発揮する存在として最も近いものでありそうになって欲しいと感じる。

4.そうそうの杜としての関わり

被災地障害者センターみやぎの活動は第1期から第2期に移行している。とはいうもののまだまだ隠れたニーズ、隠れた障害者は多いと考える。震災から3カ月を経た現在、ネットでその存在を知り他にも知らない人はまだまだいると思うのは被災者の言葉である。本当に困っている人はビラや掲示板をじっくり見る余裕は無い。正直、調査活動と言いながら障害のある人を探し出すことは困難だった。地域の中に入り込み顔を合わせて情報を聞き出すには、範囲の広さと時間の無さが災いとなっている。今後そうそうの杜としてボランティアを継続して派遣するなら期間を1カ月程度まで延長する事を前提に

- ① 地域の事業所への人員派遣から被災地障害者センターみやぎに繋げる
- ② 避難所やがれき撤去に携わり地域の中に入り込み障害のある人の情報を得て被災地障害者センターみやぎに繋げる

という方法が考えられる。いずれにせよ南三陸町・気仙沼市に関わった以上、そうそうの杜としてその地域で何らかの活動を継続すべきであり仙台市からでは遠すぎる。

東日本大震災（H23.06.21～28）
～被災地で見た事、聞いたこと、感じた事～

高橋 勲

山間部を車で抜けた途端、荒廃した海辺の町が眼前に映し出された。呆然とし、息を飲む事さえ忘れるほどの強い衝撃を受けた。そこはまさしく津波に飲みこまれた町の跡だった。

6月21日から29日まで、被災地のボランティア活動に参加させていただいた。自分の人生観、福祉観が大きく揺り動かされた9日間（実働7日間）であった。言葉に出来ない事、言葉にならない事の連続であったが、本当に行って良かった。

主に南三陸町・気仙沼市を中心に物資の提供、個別ケースの対応、避難所・仮設住宅の状況の調査などを中心に動いたが、どこに行っても見る光景、伺う話し、それらから感じすることはこれまでの人生経験の中でもなかったことばかりだった。被災者や被災者と生活を共にするボランティアの方々などとの関わりの中で、自分の無力さ、浅い考え方、当たり前のように仕事としている福祉、日常…というものが常に揺り動かされ、「生きる」ことの難しさ、有難さというものを改めて感じる日々であった。

気仙沼市では震災当日、大きな地震の後で津波警報が発令され、町中に避難命令が流された。第1波は6m、それから15分か20分ごとに11mの第2波、20mの第3波が次々と押し寄せてきた。高い黒い波が町を飲みこんだかと思うと、ものすごい勢いで引いていき、次の波とぶつかって渦をつくり、大きな建物までも飲みこんでしまった。町はものの数分で様変わりし、至る所で炎が上がり、「この世の終わりか…」と思わせる光景だった。避難の為に住民が車で高台に向かうが、道路が渋滞し、車を乗り捨てて山に向かった人は助かったが、多くの人が車ごと流された。本当に恐ろしい瞬間だった。…と聞かされた。

南三陸町では、町が壊滅的なダメージを受け、未だなお行方が分からない方々が大勢おられる。瓦礫の撤去は進んでいくが、全てがただの瓦礫ではない。一つ一つに被災した人々のそれまでの人生の歴史が詰まっている。大切なものが多く含まれている。瓦礫も「生きてきたしるし」なんだと。

震災が奪ったもの、いのち、家族、お金、住まい、仕事…全てを失い、それでも「海と一緒に生きるしかないんだ」と語られる現地の方々。また、見えるものだけでなく、見えない大切なものも奪われた…。「震災前までは本当に誰もが優しく、思いやりがあった町なんです。でも、津波は暖かかった人の優しささえも飲みこんでしまったようで、今はみんな

な生きるか死ぬかで自分のことだけで精一杯なんです。本当に悲しいです。」

第2期に入り、避難所から仮設への移動が進んでいく。しかし、現実には仮設住宅に入らない人、入れない人が多くおられる。避難所には物資がたくさん届いており、物的保障はある程度確保される。一方、仮設では「自立」とみなされ、物資の提供は打ち切られる。実際は車も流され、買物さえもままならない人、わずかな補助金のみでの生活では生きていけない人がたくさんおられる。行政も被害者でもあり、なかなか手が回らない。本当に町が復興するのか不安で仕方がない。仮設での生活の孤立を防ぐためには、新しいコミュニティの形成が不可欠である。それをボランティアでなんとか道筋を付けられないかと悩む日々だった。

様々な課題は山積みである。ただ、ボランティアとして何をすべきか、どうあるべきか考えて動く必要がある。心に大きな傷を負った方々の叫びを受け取りながら動かなければならない。被災地の方々は「生きる上ではみんなが障害者である」ということをしっかりと認識しないといけない。

障害が環境に起因する部分が大きいのであれば、ここ（被災地）では誰しものが生き辛さを抱えている。障害の有無に関わらず、生きる事の難しさ、困難と日々闘いながら、それでも「残されたからには、失った命の分まで生きなければならない」と必死でもがいている人々の力になりたい。寄り添うと言う事は、共感する事も大切であるが、ここでは共に生きる事からしか見えない事も多いように感じた。

日本国憲法が定めた基本的人権の尊重でさえ守られない環境中で、同じ国民がもたえ苦しんでいる。ただ、震災は誰のせいでもない。

復興には地元力、地域の力がどうしても必要だ。わたしたちがなすべきことは、地元につなぐことなのだろう。そして、いつの日か必ず訪れる「笑顔で過ごせる街」に向かって、どこにいても思いを一つにして生きていかなければならない。

見た事、聞いたこと、感じた事…なかなか言葉には出来ないことが多い。それでも、私自身もしっかりと生きていかなければならない。それが何より大切だろう。

以上が第1期の活動報告になります。

《第2期の活動開始》

【東日本大震災 被災地支援】 7/19～7/26

富吉 弘史

5月11日～5月19日、7月19日～7月26日と被災地に行かせて頂いた。現地の状況を見て、実際の出来事と認識するまで時間が必要でした。南三陸町を中心に活動させて頂きましたが、町全体が消滅している状況でした。志津川中学校から町全体を一望できるのですが、津波被害の大きさに呆然と立ち尽くすしかできませんでした。穏やかで遠くに見える海が、豹変し一瞬にして町全体を飲み込んでしまった結果の光景はあまりにも悲惨過ぎて表現する言葉がありません。

現地でたくさんの方と出会い、感謝の言葉を頂く度に胸が締め付けられる思いでした。この状況の中で力強く生きておられる姿には、ただただ頭が下がります。震災被害にあわなかった人間にできる事は一つです。思惑なしに被災地の復旧・復興に、できる範囲の支援をする事だと思います。しかし、現実には思惑だらけで「被災地支援」と言いながら、どこに向かっているのかわからない事がたくさんあります。悲惨な状況の中、力強く生きていく人間の強さを見せて頂いた一方で、この状況にもかかわらず一つになれない人間の惨めさを見せて頂きました。

震災から4ヶ月が経過して、被災地の様子は着実に変わっています。しかし、地区によっては、まだまだ手つかずな状態の所もたくさんあり、地元の方の話では、地区間で大きな溝ができています。沿岸部に住んでいた人、内陸部（高台）に住んでいた人、避難所生活している人、仮設住宅での生活が始まった人等、その間にも大きな溝ができていますと聴きました。地元の事情もたくさん聴かせて頂きました。書けないのが残念です。

今までは、仙台から南三陸町に向かっていましたが、7月から登米市を拠点に動く事となり、地元根付いた支援をしていく上では非常に追い風です。地元の専従の小野寺さんを中心に、地元に必要な支援体制ができていくので大いに期待したいと思います。

被災地に行く事を迷っている方へ「何ができるんだろう。」と考える必要はないと思います。何もできなくて当然、ただ現地の状況を自分の眼で見て、感じる事だけで意味があると思います。テレビや新聞等で目にするのは部分でしかありません。自分が生きている時代に実際に起こった出来事を見ることこそ意味があると思います。

最後に、一生癒える事のない傷を負ってしまった被災者の方々に、少しでも寄り添った支援ができればと心から思っています。

東日本大震災派遣 報告書

日時:平成23年 7月 22日(金)	天気:晴れのち曇り	報告者:富吉 弘史
活動者・活動地域 小野寺さん 大阪市従(Mさん・Kさん・Aさん) 富吉 活動地域:南三陸町、栗原市	活動内容 ・大阪市従:Sさん、送迎。 ・小野寺、富吉:Oさん宅訪問、仮設周り、物資 買出し・配達、志津川高校つつみさんと 打ち合わせ。Sさん送迎。	
報告事項 ・仮設周り(志津川高校仮設、田茂川仮設、平磯仮設に出かける。志津川高校、志津川中学校に繋がっているケースに物資を届ける。 ・志津川高校、つつみさんとボランティアの入り方の調整をおこなう。大阪市従さんの動き、水曜日を志津川高校対応という提示をおこなう。曜日を決めて活動するのではなく、毎日1名を配置してもらう方が活動しやすいとのこと。25日(月)大阪市従さんと一緒に志津川高校に出向き、再度に出向き、調整をおこなう。 ・Sさん、連絡調整のミスで送迎が遅れる。母親より連絡あり。送迎をおこなう。 ・K仮設のケース、要介護状態の祖母のカットの依頼あり。担当のボランティアリーダーと調整をおこなう。8月1日(月)訪問にてカットをして頂く予定。 ・Oさん宅訪問。本人はのぞみ作業所に行かれている。祖父母、叔父叔母がおられ、話を聴かせて頂く。 ・小野寺さんの知り合い、新たなケースに繋がる。		
仙台たすけっととの連携 ・23日(土)Sさん、I 公民館にて、おもちゃ図書館をおこなう。ボランティア3名依頼あり。当日、仙台よりボランティア4名、Sさんのレスパイトあり。23日(土)仙台から対応して頂く。午後、I 公民館にておもちゃ図書館に合流。		
備考 ・小野寺さんの動きが落ち着いてくれば、志津川高校を拠点とし活動していくチームを配置して取り組んでいく。 ・登米拠点、活動範囲(登米市・南三陸町・気仙沼)が広い。送迎・レスパイトと対応が増えれば仙台から応援を依頼し動いてもらう。登米拠点に人員を増やす調整を菊池さんとおこないたい。		
明日の予定 ・小野寺さん、富吉:南三陸町仮設周り、午後、おもちゃ図書館へ。つつみさんもカフェで参加。 ・仙台からの応援部隊、Sさんのレスパイト、午後、おもちゃ図書館に合流の予定。 ・飯田さん、夕方、登米の拠点入り。		

7月23日から30日まで南三陸町にボランティアで参加させていただきました。現地に行って一ヶ月以上経ってしまいましたが…。

3月11日金曜日の2時46分、地震が起こったまさにそのときは、城東区民ホール前の駐車スペースに車を停止している最中でした。目眩がしたのかと勘違いし、フロントガラス越しに見える景色が歪んだような錯覚を覚えました。ラジオからの情報ですぐに地震だと分かりました。

私が阪神大震災のとき豊中で遭遇した地震はそれ以上のものがあつたので、それほどたいしたことはないと自分なりに勝手に決め付けていました。庵に戻りテレビ画面をみると、東京でのビル火災の映像が流れていました。そのとき震源が関西ではないということを知りました。

次の日に、城東区のピアフェスタが開催される予定になっており、その日は夜遅くまでピアフェスタで出店する仕込みに追われていましたが、こんなことをしている場合ではないのでは、すぐに駆けつけなければ。という衝動にかられていたことを思い出します。

その日からの報道で被害の実態が少しずつ明らかになってくるのを見て、自分の身に迫ってくる恐怖、人ごととは到底思えませんでした。そうそうの杜からボランティア派遣が開始され、私は第二期のボランティアとして参加しました。震災からすでに4ヶ月が経過していました。

当初の思いとはうらはらに、行く日まで正直不安がありました。出来ること、出来ないこと色々あるかもしれない。でも行くことだけでも十分価値がある。

実際に現地に入り、大阪での情報だけではわからない、現場に入って自ら体験することが一番大事だということが理解できました。宮城県仙台市に到着し、登米市役所まで約1時間半。そこから10分位で宿泊施設のある拠点へ。沿岸部ではないので地震の被害そのものは、それほど目立たないように思った。ただ、道路はひどかった。ひび割れ砂利が散乱している歩道、所々のマンホールが浮き上がっている、でこぼこの国道。手付かずの状況だった。

その日に、現地のスタッフになられた震災の当事者の方と出会った。南三陸町の志津川出身で今回の津波で自宅を流され、お父様が行方不明になっている方だった。第一印象、おとなしめの気さくな方。震災の時の状況、それ以降のことなど細かい所まで話してくださったが、お父様のことは語られなかった。

お父様が行方不明になっていることを知っていただけに、私に気を使って色々とお話して下さるその姿勢に申し訳ない思いで頭が下がりました。

現地2日目に初めて被災地を視察に回る。気仙沼方面から入る。沿岸部に近づくにつれてその景色が急に変わる。津波の被害があつた地域とそうでない地域に分かれる。内陸部

にまで津波で流されてきた大型のタンカー、家屋の基礎部分すら残っていない更地、廃墟のように津波でえぐられている建物などが無数にあり、大量の車などの瓦礫をかき分けて道が作られていた。そこから南三陸町まで津波で被害をうけた地域が続いていく。言葉にならない、現実としてなかなか受け入れられない。何か別世界のものを見ている雰囲気。本当にひどい惨状だった。

実際のボランティア活動は志津川高校でさせてもらった。内容は志津川高校でボランティアのリーダーが取り組まれているカフェのお手伝い、物資の移動、草むしりなどだった。高校の武道場の1階部分が避難所で生活をしている方が約70名。9月10日までは避難所は撤退になる予定となっているとのことだった。障がい者の方はいないようで、カフェに来るかたは限られた人達でいわゆる常連の人だった。60歳代の壮年の方が「どこから来た？一緒に飲んでいけ」など気軽に声をかけてくださる。席を立たないといけなくなったので退席するが、後々聞けば奥さんを亡くされた方だった。私が分からなかっただけなのか、そんな素振りも見せられなかった。

後日の夕方、小学生が帰ってきてグラウンドで遊んでいる。同行スタッフと一緒にサッカーを始める。人数が増えてくる。中学生のような子供も一緒にしたいのだろう近くに寄ってきて様子を見ている。次第に仲間に加わりミニゲームになった。限られた時間だったが子供たちの無邪気な笑顔を見ることが出来た。ただ、もう終わりにしようと言ったとき、嫌がった表情やその子供たちの残念そうな顔は、忘れられない。次の日、その子供たちが寄ってきて私の名前を覚えており、またサッカーしようと言ってくれたが、移動カフェの準備物を運ぶのですぐに登米まで戻らなくてはいけなかったのでどうしても無理だった。それが心残りだったが、繋がっているスタッフがいることで大丈夫だという確信はあった。私の志津川高校でのボランティア活動は、今後の移動カフェのお手伝いへの準備がメインで、実際に仮設で生活されている方、避難所で暮らしている方たちと直接、接する機会は少なかったですが、この短い期間でも体験できたことは本当に貴重なものとなりました。

今回の未曾有の大震災は、家も仕事も家族も友人も、今まで生きてきた証やたくさんの思い出も何もかも一瞬にして奪い去りました。実際に被災された方の気持ちを考えると想像を遙かに超える大変さがありますが、今の自分が出来ることを精一杯する、復興復旧を祈り続けていきたいと思います。

東日本大震災派遣 報告書

日時:平成23年 7月 26日(火)		天気:晴れのち一時雨	報告者:飯田
活動場所 ・南三陸町	活動内容 ・志津川高校ボラ(つつみさん、はるさん) →物資の運び出し、草むしり、カフェ ・Sさん送迎 ・事務所整理 複合機搬入設置、パソコン及び無線LAN接続	活動者 ・小野寺さん・飯田 ・Yさん(公園支部リーダー) ・Sさん・Kさん(公園支部) ・富吉さん→帰阪	
報告事項			
・志津川高校へのボラ初日。Yさん、飯田活動。9時前に現地入り。9時15分からミーティング。一日の流れ確認。ボラ他に2グループ、計5人。全員で合計7人。各部署にリーダー設置。飯田物資のリーダー(はるさんとの連絡係)。メンバーはYさん。各部署としては、カフェ、遊び、物資、お掃除隊、Dさん手伝い(昼食)等。 ・本日はカフェがメインで飯田、Yさんは主にグラウンド内、カフェ横などに生えた雑草の草むしり。時々はるさんからの、連絡で体育館の物資を武道場2階に運搬する。(7月末までには体育館の物資をすべて武道場に運ぶ) ・武道場1階は70人の避難所。2階は休憩ルームと物資置き場。昼食、志津川高校でパンやカップめんなど提供していただける。避難所で一緒に食事を摂ることも可能。今日は、出来なかったが入らせていただき挨拶。この避難所も9/10で撤退することが決まっている。 ・つつみさんよりシャワーチェア2台依頼ある。現在背もたれなしのパイプいすで入浴しているため。可能であることを、伝える。 ・出張移動カフェの予定→8/1(月)。場所:M仮設住宅。時間:昼過ぎ ハグハウス、たすけつとがニーズを求めているとの主旨で開催したいとのこと。小野寺さんにM仮設のニーズを拾ってもらい志津川にその物資があれば提供していただく。こちらも志津川のニーズに答える。			
仙台たすけつととの連携			
・7/29(金)15時のWさんの送迎並びに、翌日のSさんのレスパイトを依頼→承諾。 ・Eさん(13歳、支援学校)土曜日のレスパイト、ある可能性。仙台のスタッフで調整できるとのこと。 (暴力が出るため、他団体に断られているケース)			
備考			
・志津川高校に入るスタッフは、それぞれボラネームを作る。腕章、ネームプレート。 熱中症対策必要。冷汗スプレー、帽子など。草むしりの活動ではかなり暑くなります。 活動は主にはるさんからの指示で動く。つつみさんは流動的に動かれており、カフェや避難所の方のケアが中心。はるさんが不在時はNさん。*8月2日(火)～5日(金)はるさんお休み。 ・Sさん 本日午後送迎なし。体調悪くなり母親から連絡。母迎え。 日時未定だが引越しの予定。三陸道インター出口付近			
明日の予定			
・小野寺さん休み 27日28日 ・志津川高校での活動 公園支部3名 →団体ボラ約15名。28日木曜日に武道場にて映画鑑賞会がおこなわれるため。スクリーンの場所を確認するため物資の整理。体育館の物資整理。草むしり。 ・飯田→気仙沼でのケース周り。 ・白石→タ方、登米拠点入り			

社会福祉法人 そうそうの杜

今回、行った期間は8日間。7月の末から8月の頭にかけて活動をしてまいりました。そうそうの杜として派遣は第二期に入り、第二期でも三番目で活動作りというかたちになりました。一度目は5月中頃に11日間行きました。

5月にいった時は、目の前の現状を受け止めるので精一杯。被災した人に初めは会うのも怖がっていました。でも、日がたつにつれもっと出会いたい。一人でも多くの人を何とかしたい。という想いでいっぱいでした。そして、その想いのままに動き続けました。でも、これが完全に失敗。

私はいち短期ボランティア。期間がくると帰ってしまう。いくら法人として繋いでいくとしてもそれは被災者には、意味をなさない。いずれ居なくなるから。その前提だと関われる範囲もせまくなる。これではダメと、7月のそうそうの杜の全体会議で気づきました。これを踏まえての二回目。意気込みとしては、地域を見て地域を作り直す。という想いで参加しました。今までの障害者に特化では、地域は作れない。大きな法人一つで地域の福祉を抱え込むという震災前の状況が嫌だから。障害に特化してしまうとまた孤立させてしまう。その手助けはしたくない。

私が活動した場所はいち避難所の志津川高校でした。まずは、物資の整理にトイレ掃除、子どもと遊ぶ等と、障害に関係のない場面での活動がメインでした。活動して3日目に仮設に移動カフェをだしたい、そこで手伝ってほしいと依頼を頂けるようになりました。喜んで引き受けました。地域を見るきっかけづくりになると思からです。我々にとっては一度目の事だったので準備から何をしたいのかわからない状態での活動でした。

しかし、結果として手ごたえはあり。これを続ければ地域を知れる。地域に入れるという感触でした。状況としては、告知なしといえどたくさんの人達がでてきてくれ、持って行っていたコーヒーは二時間程度ですべて無くなる。物資として持って行ったものはそれ以上で車二台パンパンに食糧、衣類、日用品、子ども用品これら30分程度で無くなってしまいました。仮設にはいつてからは、こういう支援は来た事がないとの事でした。何より、意味があると実感できたのはこの機会です。初めて顔を合わせた人が何人もいた。知り合いになれそう。という事でした。

この結果は、非常に意味がありました。障害ある無しに関係なく、全ての人間が生きづらさを感じて、地域で生活をする一からのスタートポイント。ここに、障害者が入れる隙間を我々が作れば…。期待は膨らみました。

さらにもう一つ、復興をかかげ確実に切り離せないものは雇用。志津川高校で活動をし、中心となって動いていたボランティアリーダーの頭打ちの一つ。自分達を中心になるんじゃないくて、地元の人に中心になってもらいたい。しかし、ボランティア活動の中心では、雇用にならない。そう分かっている地元の人に中心にたって動いてほしいとは言えない。

これに対し、障害者支援は、ボランティアコーディネートから始まり、最終的に事業に発展すれば、雇用につながる。弱者といわれている障害者がその地域の雇用を生み出せる。中心が変えられるかもしれない。これらは、障害者支援をしていく私達にとって支援していく上で、大きな充実を感じる事ができると思いました。

このような書き方では、私達の為という風に伝わってしまうかもしれませんが、大前提に被災地をなんとかしたいという想いがあるのです。



東日本大震災派遣 報告書

日時:平成23年 7月 31日(日)	晴れ タ立あり	報告者:白石
活動内容		
9:00 12:00 16:00 志津川高校 ・カフェ準備 ベイスイド復興市 志津川高校 ・子どもたちと遊ぶ		
活動した上で感じたこと		
①本日は、物資整理が終わっていて、活動内容にゆとりがありました。週末は、ボランティアが多く、炊き出しに三団体くらいきていました。避難人数よりも多い人間がウロウロし、マナーなども無い状況。ボランティア同士が騒ぐ状況。避難所の人は来てくれるだけいいんだけどね。という感じ。後は、売名行為が一番迷惑。作った地蔵を置かせてくれなど。。。 ②今日は時間もあり、堤さんとゆっくり話す時間もありました。避難している方々は朝も掃除をしている。人も減ってきているので活動していないわけではない。しない人達に対しての非難の声もあがっているようです。昨日までの疑問は少し解消されました。 ③堤さんとしても現地の人で、ボランティアをコーディネートできる人がいれば雇いたいくらいとのこと。しかし、雇う余裕もないが、その後の仕事として成り立たないことを懸念していました。そういう意味では障害に特化の方がシナリオが描きやすいと感じました。またこれを逆にとり、被災前とは我々のかかわり次第で大きく変わるのではと感じました。		
感じたことを改善・向上させるのに必要なこと		
①ボランティアに入る姿勢は、人によってまちまち。これは汗をかく作業ですか？と平気で質問してきたり。一番多いのは達成感を求め瓦礫撤去にくるが、天候や人数で志津川に回される人。対人への対応は望めない。こちらへんははるさんも大いに理解しており、人員配置を考えています。 ②混乱は解消です。切り替えます。 ③ひとつの支援団体では地域を作れない。今後は様々な支援団体との連携が必要。今日、来ていたのは女性の為の支援団体。つつみさんとしてもこれを考えた上で、付き合っているとの事だった。障害者に特化した被災支援は今後の障害者支援という雇用へつなげるのをうまく使い、障害者が強者の地域を作りたい。		
他へ依頼したこと		
・はるさんより、支援物資のトマトのプランタ等の整理をして欲しいので市役所をつれてきて欲しいとの事。また、明日の移動カフェの人数確保の為。三名のうち、一名のみ志津川入りを調整予定。		
備考		
・はるさん、火曜日より休暇。土曜日に戻ってくる。Nさんはもう戻らないとの事。リーダー不在になるので、つつみさん、Sさん(登米出身ボランティア。求職中で次の仕事が見つかるまでいる予定)を中心に動くことになる。 ・つつみさんのはぐハウスのメンバーは志津川高校に寝泊りしていたが、避難所撤退にむけて新しい拠点に引越し。志津高より車で10分ほどの事。時間があるときに見学させて頂きたいと思います。		
明日の予定		
小野寺さん：午前拠点にて。昼から合流し、移動カフェ。 白石・金原：志津川高校。昼から移動カフェ。 市役所さん：2名送迎。1名志津川高校と移動カフェ		

社会福祉法人 そうそうの杜

私自身、18年前、当時は高校2年生だった私は、阪神大震災の時に、バイクで毛布を届けた経験がありました。瓦礫が散乱している中一つの体育館に届けに。その時私は、言われるがまま、指示を受けて動きました。当時は、何をしたらいいのか分からなかったが、どこかで「ボランティアしてあげている、きたってる」精神で動いていたのが、正直なところで、他人事のように絶対復興させるんだなど心から思えませんでした。違う国に来て手伝ってあげてるといふ気持ちの方が強かったです。

東北へ向かう新幹線の中、「自分に何が出来るのか？俺が行っても大丈夫なのか？」自分のことばかり考えていました。しかしいざ現場の風景、被災された人の表情、実際に被害に遭われた小野寺さんや総リーダーでもあるつつみさんの話を聞く中、一遍、「なんでもいいからさせてもらおう」という気持ちに変わっていきました。南三陸町志津川高校避難所のボランティアとして動く中、避難所はいずれ撤退してほとんどの人が、仮設住宅へ入居して、次にみんなが求めていることは何か？つつみさんは「これからは人が大事なんだよ。物資は何とかなるから！」と。コミュニティ作りの手段として、仮設住宅へ周らせて頂き、駐車場等空いているスペースをお借りしてお茶を飲みながら、ニーズ調査や個別ケースに繋げていく動きをしました。実際、こちらからは話は出来ずに聞いてばかりでしたが、「話を聞いてくれてありがとう」と涙ながら感謝の言葉を頂く場面もありました。「立ち止まっではいけない。前に進まない」と。逆に励まされてしまいました。どんな場所でどういう人と出会うかわからない環境の中、一回一回の出会いを大事にしようと心に決めて動きました。視覚障害はあるが、もっと外出したいといわれていた人、車もなく、家が流されて、生まれたばかりの子供の世話でいっぱい動けないお母さん。以前は漁師をしていたが、仕事がない人等…。そういう声を政治家たちはどう考えているのか？国民の為に働くと言って、何をしているのか？そういう人たちにだんだん腹が立ってきました。

わずか一週間でしたが、感謝・素直さ・誠実・平等・言葉のかけ方を少しながらですが、感じる事が出来ました。どこへいても常に異体同心の気持ちを大切にしていきます。

東日本大震災派遣 報告書

日時:平成23年 8月 3(水)	くもり	報告者:金原
活動内容		
9:00 志津川高校 ・移動カフェチラシ作り ・物資搬出	12:00 Y仮設住宅 ・ミニライブ ・訪問、リサーチ	15:30 志津川高校 ・ボラミーティング
活動した上で感じたこと		
①今日は一日ツアーボランティア20数名が来ており、ボランティアリーダーが調整・分担するのにかなり戸惑っていて、する事が決まっていたのに、時間だけすぎて、もったいない様子がみえた。大勢の人員が志津川高校に来て、少し異様な雰囲気でした。避難所の方々も圧倒されて、少し引き気味。大勢の人を単に入れたらそれでいいの必要なのか疑問を感じた。 ②移動カフェの下見も兼ねてY仮設住宅(仮設の中でも一番よくないとのこと)を訪問リサーチをする中、昨日志津川高校でライブをされたバンド数名の方がミニライブをして下さるということで合流。人が集まってきて歌ったり、掛け声を出したりととても和やかな時間が過ぎ、音楽の人を引き付ける力がすごいことを改めて感じたとともに、お話もゆっくり聞くことが出来てすこしづつ長くつながっていくことが大事だと感じた。		
感じたことを改善・向上させるのに必要なこと		
①日々刻々と状況が変化していく中なので、被災者の方があくまでも中心だから、ボランティアの方は私も含め、被災者の気持ちをすこしでも汲み取れる、溢さないことが必要ではないか…。 ②つつみさんも言われていましたが、仮設周りをするなか、すこしづつではあるが、個別のケースを拾い、永続的につなげていく、他と連動させていくことがこれからの支援において問われていく部分だと思った。		
他へ依頼したこと		
特になし		
備考		
特になし		
明日の予定		
・小野寺さん:休み ・市従さん:Wさん送迎(2人)・Hさん訪問(1人) ・金原:志津川高校ボランティア ・真頼:夕方登米入り		

社会福祉法人 そうそうの杜

1.被災地障害者センターみやぎについて

活動に入る前に仙台市の本部事務所にて挨拶を済ませた。本部内の雰囲気も良く、そこに居るスタッフ・ボランティアが皆同じ方向に向いているように感じた。ゆめ風基金理事である八幡さんとも短時間であったが話しする事が出来た。各エリアのリーダーの方達も「CIL たすけっと」本来の業務に加え「被災地障害者センターみやぎ」のボランティアチームとの連絡・連携・情報把握に勤しんでいる。6月に私自身が関わった時点に比べて慣れ・余裕が出てきているように感じた。従って細かな部分に配慮が行き届きスムーズに物事が流れている。

2.志津川高校避難所について

菅内閣が示した仮設住居への完全入居とそれに伴う避難所の閉鎖は目の前に迫っている。各避難所に併設する避難所ボランティアセンターではそれぞれに見通しを立てて緩やかに閉鎖のための準備をしていた。ただし、閉鎖してそれで支援が終わるというものではなくその後のアフターフォローも視野に入れている。自治体の行政機能や地域としての生活基盤が回復するまではそれぞれの避難所ボランティアセンターが今後も継続的な支援を続けるようである。もっともな事ではあるが具体的にいつまでその支援を続ける事が出来るのか・・・。

同じように志津川高校避難所ボランティアセンターでも議論がされていた様である。詳細を知ることはできなかったが閉鎖の日程等大まかな内容は知る事が出来た。志津川高校ボランティアセンター内部でも意見の相違があり方向性の統一が出来ていないようであった。1日ボランティアツアーも含め、数多くのボランティアが関わる中、非常に難しい問題を避難所ボランティアセンターが抱え処理していかなければならない。国、県レベルでの行政では感知していない諸問題をボランティアの力で処理している現状は日本人の力強さと自治体の行政力が崩壊した恐ろしい状況である事を感知する事が出来た。

3.仮設住居調査活動について

志津川高校避難所ボランティアセンターが空中分解する危険性をはらんでいる中アフターフォローの必要性を訴えるボランティアグループと活動を共にすることが出来た事は良かった。仮設住居への調査活動についても入居者の話を聞き取るための一つの手段としてカフェを利用するアイデアは非常に有効的であった。「被災地障害者センターみやぎ」が目的とする障害のある人の情報収集としても有効であり、得られる情報量は6月時点での飛び込みの調査活動に比べ格段に多かった。実際、地域にも知られていない障害のある方や、早い段階で内陸部に避難していた方達と出会う事ができ、飲み物を飲み

ながら和らいだ雰囲気の中で話を聞く事が出来た。「被災地障害者センターみやぎ」の情報を知らない方もあり調査活動自体も以前に比べ活発化している事が実感できた。多くの仮設住居を調査する中でカフェの存在が入居者の心・表情を和らげ話しやすい雰囲気を作り出す事が出ている。「被災地障害者センターみやぎ」本部へもその有効性を報告し、今後合流できる時には合同で実施できるよう依頼した。

4. 仮設住居入居者について

仮設住居の立地条件の悪さはどこを見ても差はない。高齢者では移動に不便な高台に建設され自動車が不可欠である。交通弱者にとっては買い物・通院等日々の生活において困難な状況である。家族・家・財産等何もかも失った被災者にとって隣に住んでいる人がどんな人なのかわからない環境での生活は、非常に苦しいものであると想像できる。そのような中に調査活動として入り込み、聞き取りをし、思い出したくもない話を聞き出す事は心苦しく感じた。涙ながらに震災当時の話を話してくれ「聞いてくれてありがとう」と言ってくれる人はまれであった。障害者に特化した支援に限定せず被災者の“心のケア”に関わる活動に携われた事は私自身にとって非常に良い経験であったと思う。特に被災者の言葉を聞き取る際は言葉を選び慎重になったつもりであるが相手の“心のケア”という面では不完全であり力不足であった。かける言葉が見当たらない。今にして思えば、仮設住居でイベントを実施した際は仲の良い入居者グループがやって来て賑やかに話して行く。何となく楽しい雰囲気で時間を過ごしているが本当は1対1でじっくりと話を聴いて欲しい人もいたのかもしれない。かける言葉も見当たらず聞く事しかできなかった。

5. 今後の南三陸地域での活動の方向性

東日本大震災の発生から6ヶ月が経過しようとしている。南三陸町自体も社会福祉協議会の生活支援員の増員が始まり様々なボランティアグループとも連携しながら活動を始めている。社会福祉協議会及び生活支援員自身も試行錯誤しながらバザー等を企画し連携の輪を広げている。私が活動した期間は震災発生から5ヶ月を迎える時期であり、5ヶ月を経てようやく被災した地域の人たち自身の手で復興に関わる大きな動きを見ることが出来た。まだまだ時間はかかるであろうが少しずつ前へ進んでいる。

避難所の閉鎖に伴い各ボランティア団体の活動撤退がせまっている。地域の人達も自身の力で少しずつ動き始めている。では、「被災者障害者センターみやぎ」に関わる送迎等の個別ケースについてはどうなるのか。地域の事業所が活動を再開し軌道に乗るまではもう少し時間が必要だろう。それでも可能な限り早い時期に地域の事業所への橋渡しをしていく事が重要になってくる。活動撤退の期日が来たから「明日以降はできません」ではいけない。いつまでもボランティアがやるべき事ではなくボランティアがやらなくても良い南三陸町に近づける事を考えつつ活動しなければならない。

東日本大震災派遣 報告書

日時:平成23年 8月 7日(日)		快晴		報告者:真頼	
活動内容					
9:00		10:00		13:30	
志津川高校		物資配達		T仮設調査	
ボラMe		仮設調査		志津川高校	
		S仮設		登米拠点	
		I 仮設3ヶ所		小野寺さんと	
		移動カフェ下見		新規市従さん含め	
				打合せ	
活動した上で感じたこと					
I 仮設住宅3ヶ所は内陸部の集落の中に存在し3ヶ所ともに30戸～60戸程度の規模の小さい仮設住宅である。自治会はまだ結成されていないが中学校の仮設は推薦された人が承諾すれば結成となることを入居者が教えてくれた。自治会が結成されなければ入居者負担である汚水処理も進まず悪臭が漂っている仮設もある。規模の大きな仮設住宅ほど自治会の結成に時間が掛かっている。 T仮設は次々回移動カフェの予定地と考えている。67戸の仮設住宅であるが社協の生活支援員が付近仮設に拠点を構えているためいろいろと協力した取り組みが可能である。志津川高校避難所で余った物資を持っていくと積極的な入居者は友人を連れて受け取りにやってくる。もらえた人ともらえなかった人との確執がおきやすい。「移動カフェ」に来るからそのときに準備しておくことを伝える。					
感じたことを改善・向上させるのに必要なこと					
「移動カフェ」を実施するには ①実施日の決定 ②候補地の決定 ③予定地の下見とチラシ配り が必要であり段取り良く他ボランティアを動かす必要がある 市従さん初日は市従さんとの打ち合わせの時間を確保する					
他へ依頼したこと					
特になし					
備考					
小野寺：13～16 お盆休み 大阪市従：12PM～20 活動休止のため8/13土 Sさん対応と8/18 Sさん対応は そうそうの杜で対応の必要あり					
明日の予定					
・小野寺さん:休み ・市従さん2名:Sさん送迎 ・真頼:市従1名とともに訪問理容送迎後仮設調査					

社会福祉法人 そうそうの杜

東日本大震災ボランティア感想

第二期：H23.08.08～15

林 直輝

そうそうの杜、ゆめ風基金、被災地障害者センターみやぎのボランティアとして4月半ばに女川町へ、そして8月に南三陸町に行ってきました。震災のニュースを見たとき、とても他人事とは思えず、何かしたいと思い派遣を希望しました。また、普段関わっている高校生たちに被災した人々や地域の現状を伝えたいという想いがありました。しかし実際に現地に行くと確実に何かを感じているのに何を感じているのか分からないような状態になっていました。風景や中身を伴わない様子だけなら伝える事は出来たかもしれませんが、それでは伝える意味が無くなってしまい、そう思いながら時間が流れていました。そうそうの杜としては4月～6月を第一期として、7月～9月を第二期として派遣を決めています。第二期の派遣も希望したところ、夏休みということもあり彼らも一緒に行く事になりました。

4月の活動は避難所を回り障害のある人がいるかどうか、いた場合はその現状とニーズを確認してくるというものでした。震災からまだ一ヶ月ということもあり、情報もまだまだあやふやでなかなかケースに結びつかず避難所を回る日々でした。不自然に平等な活動が目につくことが多い中、不平等にピンポイントでニーズを拾い上げていく活動は大きな意味があると感じるものの、なかなかそこに結びつかず、気持ちだけが焦り空回りしていききました。ゆっくり時間をとって一人一人と話をしたいという思いと、短期間しかいないのだからできるだけ多くの避難所を回り少しでもケースに結び付けたいという、相反する思いでいっぱいでした。活動を終え帰阪してからもしばらくは微熱があるような、何か足元がふわふわしているような、何が現実なのかかわからないような感覚が続き、何を伝えるべきなのか、伝えないといけないのかかわからないままでした。そんな状態でも一つだけ確実に言えたのは「現地に行って、見て、聞いて、感じてくることが絶対に必要」ということでした。

8月の活動は仮設住宅を回り、地域のコミュニティ作りのきっかけになればということから移動カフェを行っていました。カフェに参加した人たちの心のケアが目的でしたが、個人的にはただ話を聞くことしか出来ませんでした。先に書いたとおり高校生達を連れて行きました。最初のうちは旅行気分もあるように見えたのでどう動いてくれるか心配していましたが、現地に入ってからそれが杞憂であるとわかりました。私が考えていたよりもずっとずっと考え、動き、感じてくれていました。子供たちと上手に遊ぶ姿、大人たちに可愛がってもらう姿、高齢の方たちの話に耳を傾ける姿、普段はなかなか見せる事の無い表情を沢山見せていました。彼らはこの活動を通じて、他人事でしかなかった震災

が現実起きたことであること、それを体験し苦しみや悲しみを感じている人がいるということ、それでも懸命に今を生きている人たちがいるということ、たくさんの事に気づき、心を痛めていました。活動を終え帰阪した彼らは「また行きたい」とこれまでボランティアに行ったスタッフと同じ事を口にし、現地の人たち、今回出会ってくれた全ての人たちに思いを馳せています。

4月に行ったときに目の前を覆いつくしていたガレキは整理され、更地が広がっていました。その景色は震災の後処理が進んだことを感じさせると同時に、ガレキと一緒に、人がいたという空気も整理したかのようで、とても寂しく感じました。現地の人々の心もまた、日常を奪い去られ混乱の極みにあった震災当初に比べ、その景色のように少しだけ整理されたがゆえに空虚な状態なのかもしれません。それでも雑草のように前を向かないといけないと感じているのではと活動を通して感じました。雑草のような力強さを持っているのかもしれない、けれど、その根が張ってある土に染み込んだ塩はまだまだ抜けていないのだと思います。雑草ではなく本当に育むべきものを自分達で育ていけるように、心の塩が抜けるよう現地の方の近くにいることができればと思います。



東日本大震災派遣 報告書

日時: 平成 23 年 8 月 11 日 (木)		天気: 快晴		報告者: 林	
活動内容					
9:00	10:00	11:00	13:30	14:00	16:20
	志津川高校	H 仮設 ミニカフェ	平成の森 移動カフェ下見	志津川高校 物資整理 14:46 震災五ヶ月の黙祷	Oさん訪問
活動した上で感じたこと					
今日はH仮設にてミニカフェ。規模の小さい仮設で入居されているのは地元の人ばかりで近所づきあいもあるようだが、まだ自治会ができていないようで、談話室があるのに誰も鍵を持っていないので利用できないとのこと。せっかく用意してあるのに仮設の全入居後に自治体の設置となるため使えていない施設があるのはもったいない限り。漁業を生業にしていた方が多く、H地区では地震があったら港に停泊している船を沖に出すようにする習慣があるらしく、地震後船に乗りそのまま数日間船上で過ごしたという方が数名いた。仮設以前の繋がりもあるためかカフェで穏やかに世間話をして時間をすごされていた。中にはボランティアに差し入れをしてくれる方もおり、ありがとう、また来てねと見送ってくれた。 その後はミニカフェではなく移動カフェの下見に平成の森へ。ベイサイドアリーナの社協が管理しているカフェ、あづま一れがあり、今後協力していけたら、という話をする。 志津川高校に戻ってからは物資の整理を行い、14:46からの黙祷、堤さんたちと一緒に歌を歌い休憩をとる。 *濱崎くん、今日もギターを忘れてしまうが仮設にいた子どもたちとポケモンの話で盛り上がっていた。学校から出されているレポートもいつもでは考えられないくらいスムーズにたくさん書けている。被災した人と接しているときは何の問題もないのだが、ふとしたところで心無い言葉が出てしまう。その都度説明し、言わないよう伝える。 *勝呂くん、浜崎くん同様仮設の子どもたちと楽しく接することができていた。震災五ヶ月の黙祷にはあまり参加したくないと前日に漏らしていたのだが、参加した後は何か思うことがあったようで急に黙り込む。こちらが問いかけでも返事もないため、勝呂くんの中で少し整理できるまで時間をおき、話をする時間を作って想いを整理することが必要。明日の送迎には行かずに志津川高校でボランティアをしたいという言葉も出ていた。明日別紙送付					
感じたことを改善・向上させるのに必要なこと					
足の不自由な高齢の方の利用も多いので明日からカフェ用にイスを用意していく。 カフェの時だけではなく、現地の人と接するときには気負いすぎないこと、ボランティアで動いているという感覚ではなく、ごく自然な人と人の交流であることを意識しておけばカフェを利用している人にも自然と笑顔が出てくる。					
他へ依頼したこと					
特になし					
備考					
8/13 Sさん、たすけつとで対応する予定だが、不安があるようでそうそうの杜から一名来てほしいと要望あり。要調整。					
明日の予定					
・大阪市公園ボラ3名: 帰阪 ・林、濱崎、勝呂: 志津川高校ボラと合流後仮設調査+ミニカフェ後、山田送迎の為、仙台へ ・山崎、山田、登米へ					

社会福祉法人 そうそうの杜

私は前回、5月下旬に東北に行きましたがその時はまだ田植えの時期で寒々とした風景でした。今回、新幹線の車窓から見た風景は稲穂が青々と実り、被災された方々の復興、自然の回復力を感じました。

しかし、南三陸町に着くと前回あちらこちらに散らばっていた瓦礫が山のように集められているだけで、復興はまだまだと思い知らされました。

第二次ボランティアの目的であるミニカフェによる心のケア。私が行ったのは海岸沿いの漁師まちの仮設でした。玄関を叩き、ボランティアです。と挨拶します。そしてたくさんのご高齢の方々とお話させていただきました。津波について、「ただ、悔しい。」と涙を流される方、『津波のバカヤロー』とおっしゃり涙される方。お話を伺い、「もっと泣いていいんですよ」と声をかける私。ミニカフェはお話して楽しんで頂く場所ですが、悲しい思い出を忘れない、被災された方にもっと強く生きていただき、私たちボランティアがもっと強く生きていくための言葉が聞ける場であると思います。

戸倉中の仮設でミニカフェをしようと思った時、慶應大学の学生さんがアイスクリームを配っておられました。週に1回来ておられるそうですが、前回も同じ日だったそうです。週1なのに日時がかぶりますね。というお話をしているとボランティア仲間ののぶちゃんが「いいんじゃない？だって目的が違うでしょ？私たちはお茶出すのが目的じゃないもん。心のケアするのが目的だもん。」とおっしゃった言葉が忘れられません。



東日本大震災派遣 報告書

日時: 平成 23 年 8 月 15 日 (月)	天気: 快晴	報告者: 山崎						
活動内容								
<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 33%; text-align: center; padding: 5px;">10:00 10:30</td> <td style="width: 33%; text-align: center; padding: 5px;">13:30</td> <td style="width: 33%; text-align: center; padding: 5px;">15:00</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center; padding: 5px;">志津川高杉S仮設 ミニカフェ</td> <td style="text-align: center; padding: 5px;">N仮設 調査</td> <td style="text-align: center; padding: 5px;">志津川高校 ミーティング</td> </tr> </table>			10:00 10:30	13:30	15:00	志津川高杉S仮設 ミニカフェ	N仮設 調査	志津川高校 ミーティング
10:00 10:30	13:30	15:00						
志津川高杉S仮設 ミニカフェ	N仮設 調査	志津川高校 ミーティング						
活動した上で感じたこと								
めぐみさん、Nさん、RさんとS仮設に行く。ここは第13次仮設で入居されているのか？確認の意味もありましたが、今月の12日に鍵がもらえたそうです。暑かったのですがまだ引越しの途中の方達がたくさんおられたのでお茶で喉を潤おしていただくため、ミニカフェを開きました。この仮設は皆同じ集落の方でほとんどの方が親戚関係との事で皆で協力できる関係と伺う。お盆のお昼前でしたが、たくさんの方が来られました。 お昼ごはんを食べた後、N仮設に移動。この仮設は元公園で屋根付きのベンチがあり、そこが涼しいので、お年寄りのおしゃべりの場となっていました。ここも同じ集落の人ばかりで皆顔見知りの関係とおっしゃっていました。ただ、高齢者が多く、U中のバザーは車が無く行けなかったそうです。夏服はたくさん有るが秋冬物の服が少ないとおっしゃり困っておられます。めぐみさんが調整されます。また、このような小さな仮設にはお盆用の花も届かなかったとおっしゃっておられ、志津高の鉢植えプランターをお届けする予定です。 今日は2箇所共に小さな仮設で皆さん顔見知りの関係でした。そのためか、一人の方とお話しているとすぐに別の方も集まって来られたたくさんの方とおしゃべりさせていただきました。								
感じたことを改善・向上させるのに必要なこと								
*めぐみさん達はミーティングに間に合わなければならないので、次の日に回る予定の仮設に前もって行ってみました。昨夜、林さんに調べてもらったのですが位置がわかり難い所(検索できない)もあります。								
他へ依頼したこと								
なし								
備考								
仮設の見取り図が入り口にあるので、心のケアと同時にどの戸にどなたが住んでおられるのか？家族構成等の細かな調査もしていきます。								
明日の予定								
山崎:ミニカフェ、仮設調査。 日浦、登米拠点へ。								

社会福祉法人 そうそうの杜

東北ボランティアを振り返って（8月16日～8月23日）

日浦 陽香

3月11日から、テレビで今回の地震について繰り返し伝えていた。

今回初めて東北へ行き、感じたことはテレビでみてきたものとは大きく違い、「現実」というのを肌で感じることにばかりだった。

南三陸町の津波が来たであろう場所から景色がガラッと変わり、私は言葉を失った。しかし、これでも以前に比べたらかなり綺麗にされているとの事。すべて流されてしまい、更地になっている。生活していた場所がなくなっている。

初日のボランティアに入る前にベイサイトアリーナの身元不明者の方のご焼香に参加させてもらった。震災から5ヶ月が経ち、お盆も過ぎた中、未だに身元不明者がたくさんいるのを目のあたりにしてそこでここで起きた現実を感じた。苦しい、やり場のない思いでいっぱいになり、涙が止まらなかったが、一緒に今行動している志津川高校ボランティアのめぐみさんに「そういう思いをした人の所に今から行くからね」という言葉で今から出会う方々のことを思い、「この場所に最初に来てよかった」という思いと「これから何ができるのだろう」という思いがゴチャゴチャしていた。

1週間を通して、仮設住宅を回り、その仮設での生活の状況、自治会ができていいのか、また障がいがある方がいるかの調査を主に行った。私は基本的に歌津地区の調査を行った。仮設住宅に入ってきたのはその仮設によって違うが、大体数日という方もいれば、一ヶ月少し経った方もいる。仮設によっては全く違う地域から集まっている所もあるようだが、歌津地区は地域の人があるまま仮設に入っているようで顔見知りも多いと話されていた。

最初はどやって被災者の方に出会っていけばいいのか分からず、オロオロしていたが、長期のボランティアで入っていたのぶさんに同行させてもらった。

いたって普通に。構えず、少しずつ話をしていく。相手との話をする時の間をとるのがとても上手で素晴らしいと感じた。どこまで聞いていいのか分からず不安でいたが、相手のほうから震災の時の様子を話してくださることも多かった。

ある人が「震災などは他人事だと思ってたけど(今回のことがあって)みなドキュメントがあるもんだ」と話されていたが、その通りでみな何も持たずに逃げた。家族に会えなくて不安だった。避難所の話などたくさん話を聞くことができた。「3ヶ月くらいは話せなかった」という人も。

でも今は笑って話をしている。着実に前を向き、進んでいると感じた。「みな同じように失ったから」という言葉もよく聞いた。「自分だけではない。みんな頑張っている」という思いが支えているのだと思う。人と人とのつながりの強さを感じる。

その中で私たちがどう入っていくか。調査もあるが、話を聞いていくことが大切なのだと思う。調査と同時にコミュニティ作りの手伝いができたらとミニカフェを開き、みなさ

んが集まって話せるような場所を提供していた。その場で他の人としゃべり合うことは大切だが、やはりみな大変な思いをしているから自分の話ばかりできないでいるのかも。

話をしていく中で、何件かお宅に入らせてもらうことがあった。外ではなかなか話せないけど一対一になったからこそ話せる話が出てくる。話しながら少しずつ少しずつ心の整理をしているのではないかと思う。私にはその人たちを癒すことはできないけれどその整理の手伝いや思いをちょっとずつしんどかった時の思いをもらっていけたらと思う。

出会ってもやはり 1 週間。その場にいる時間は被災者の方たちにとってはわずかな時間だからこそ、今回の派遣はリレーのバトンのように繋げていくことが大切だと感じた。私が引き続き訪ねることができなくても、後に繋げていき、再び訪ねてもらえたら、私自身も嬉しいし、相手も喜んでもらえるのではないかな。

私がいる間に障がいを持っている方(この震災の場合、みな障がいがあるとあてはまるような気がするが)に出会うことがなかった。もともと、高齢の方が多い地域で家族が家族をみていくことが当たり前の場所。もしかしたらいるのかもしれないけれど言えないのかもしれない。でもそれは無理やり聞くことはできないのでそれこそ、何回も訪ねて話をしていた中で分かってくることではないかと思う。

今まで経験のしたことのないほどたくさんのことを考え、私に何ができるのかを考え続けながらのボランティアだった。初日はどう話していいのか分からなくてオドオドしていたが、最後には笑いながら、時に泣きながら現地の方とお話することが一週間でできるようになっていた。それが嬉しかった。

あともう 1 つとても嬉しかったこと。私の行く 1 週間前にそうそうの杜から高校生がボランティアに宮城に来ていた。そこでたすけっとの小野寺さんと出会い、宮城でも元気にいつものように大阪のノリで周りとお話していたそう。その会話を聞いたり、高校生たちが感じたことについて話したことを後に私にも教えてくれた。その中で小野寺さんは、「ずっと人のことなどで泣くことはあったが、自分のために泣いたことがなかったけど、昨日泣くことができた。」と話されていた。そこで「あ～、彼らに癒されたんだな～」と思ったの。という言葉聞いて今回、彼らが宮城に行ったことの意味がすごくあったな～と感じた。

「人を癒すことができるのは人。」とどこかで聞いたことがある。たくさんのお会いがあった。真正面から人と向き合うこと、この経験は忘れられないと思う。

今後も色々な問題は出てくると思うが、少しずつ前に進んでいるからこそ、その手伝いを長く長く続けていけたらと思う。

東日本大震災派遣 報告書

日時: 平成 23 年 8 月 18 日 (木)	天気: くもり	報告者: 山崎、日浦															
活動内容																	
<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 20%; text-align: center;">10:00</td> <td style="width: 20%; text-align: center;">10:30</td> <td style="width: 20%; text-align: center;">11:00</td> <td style="width: 20%; text-align: center;">13:00</td> <td style="width: 20%; text-align: center;">15:00</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">志津川高村M仮設</td> <td style="text-align: center;">N仮設</td> <td style="text-align: center;">T地区仮設</td> <td style="text-align: center;">志津川高校</td> <td style="text-align: center;">ミーティング</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">プランター運び 物資配達</td> <td style="text-align: center;">調査</td> <td colspan="2"></td> </tr> </table>			10:00	10:30	11:00	13:00	15:00	志津川高村M仮設	N仮設	T地区仮設	志津川高校	ミーティング	プランター運び 物資配達		調査		
10:00	10:30	11:00	13:00	15:00													
志津川高村M仮設	N仮設	T地区仮設	志津川高校	ミーティング													
プランター運び 物資配達		調査															
活動した上で感じたこと																	
本日は物資配達や仮設周りを中心にするため、ミニカフェは行わない方向で出発。(めぐみさん、Nさん、Sさん、Yさん、山崎、日浦の6名)まずは、以前プランターのお花が欲しいと言われていたM仮設に配達へ向かう。以前立ち寄った際、アルコール依存症の息子さんがおり、その母が仮設に入り、2人きりなので心配なので声をかけてほしいという声があったので立ち寄るも留守だった。また寄る機会に出会いたいと思う。その後、昨日物資が欲しいと言われたN仮設に物資用意が出来たため届ける。この仮設の中には避難所ではなく、親戚の家などに避難し仮設に入ったために秋、冬の衣類など全くもらってこなかったとの事。そのため、物資で持っていくと「ありがたい」という言葉が多かった。数的にも仮設の皆さんに配布できる量ではないので仮設内で分けてもらうことに。足りないのもまた見つけ次第届けると伝える。その後、仮設調査でT仮設を向かう。ここも隣にある宿泊施設にて集落まとまって避難生活をしていたよう。話を聞いた方には船が流され、北海道の釧路に流れついたという連絡を受けたそう。ちょうど大雨が降ってきたため、お宅にお邪魔し、雨宿りをさせていただいたが、ミニカフェをする側がもてなされていた。なかなか地震後は言葉がなかなか出なかったが、話すことによって気が楽になるという言葉にこちら側がうれしくなった。 時間がなかったため、仮設調査は1つだけだったがゆっくりじっくり心のケアをしていくためにはこのくらいの時間話をしていく必要はあるのかもしれない。しかし、T仮設に障がいがある人がいらっしやるかも?という情報があったのでもう1つ仮設をまわりたい気持ちがあったが時間都合でできなかったのもまたまわりたいと思う。																	
感じたことを改善・向上させるのに必要なこと																	
*なし																	
他へ依頼したこと																	
なし																	
備考																	
明日の予定 ①Y仮設にてチェロなどの演奏会があるため、それに併設する形で移動カフェを行う。ボランティアセンターからも応援があり、大きいものになりそう。 ②菊池さんが登米拠点に来られる。仮設でお風呂が狭く、身体障がいのある高校生男子が両親の入浴介助で入っているが、大変という話があるので登米拠点の裏にプレハブのお風呂を作ろうかという話になっているとの事。お風呂ができれば、他にも入浴で困っている方はいると思うので後々には入浴介助としてそうそうの杜に入ってもらおうかもという話がありました。明日はその下見。																	
明日の予定																	
日浦:移動カフェ(Y仮設にて) 山崎、栗田:朝、夕 Wさん送迎。あいまに移動カフェ 菊池さん:午後より登米拠点へ。 小野寺さん:終日登米拠点。																	

社会福祉法人 そうそうの杜

東日本大震災被災地支援について

栗田聖子

期間：2011年8月18日（木）～21日（日）

東日本大震災被災地支援に行かせて頂き、活動期間は実質2日間という日程であったが、多くのことを学ぶ機会となった。まず、震災から約5か月経った今現在も活動拠点となる志津川高校周辺は生活そのものが山積みにされた状態であった。

震災当初に比べると、道路が整備されつつあり、流れ着いた物もだいぶ分けられていたようだが、当時の状態を知らない自分は、そこから衝撃を受けてしまった。ニュース等で映像を観る機会は何度もあったが、ここまでひどいというように思っておらず、震災の惨劇を甘く見ていたからだろう。

現地では2日間、障がい者支援に限らず仮設を廻り、被災者の方のニーズ調査、移動カフェの実施に参加させて頂いた。仮設訪問や移動カフェに来てくださった方々は、こちらからの声かけに震災当初の状況等を語ってくださったり、初めは元気そうに振る舞っていた方が時折言葉に詰まりながらも心境を語ってくださった。

共通して、住民の方は震災のことを聴いてほしいという想いはあるが、時間が経過した今、近隣住民と震災の話はあまりできず、第三者である私たちに聴いてほしいのだと感じた。津波で流された、家族が亡くなったという話を見ず知らずの出会ったばかりの人に話せる驚きと、当事者同士では話しにくい環境が現在の被災地の現状であると知ることができた。

そのため、継続して気軽に交流できる場、心のケアがまだまだ必要であると感じる。また、話を聴く中で、被災者の方が元気だということも印象的であった。5カ月という期間の中で、前向きに生きていこうという転換期でもあった。

しかし、自分は4日間被災地に滞在したのみで、転換期を迎えている現在の被災者の方の心境の変化についていけず、どう対応して良いのか解らないまま活動を終えたのが実際のところである。支援に参加している者が変化に対応できないというのは、前向きに歩き出している方々にとって良くないとは思っているものの、行動に移せないもどかしさが湧きあがっている。

短期間であったが、被災地に行かせて頂いた経験は今後に役立つだろうと感じられた。普段の生活にも結び付く気づきが現地での活動の中でも共通してあること、また、被災地の支援は継続して行う必要があり、今後も状況の変化に柔軟に対応しなければならないと感じた。

東日本大震災派遣 報告書

日時: 平成 23 年 8 月 20 日 (土)	天気: くもりのち雨	報告者: 栗田、日浦								
活動内容 <table style="width: 100%; margin-top: 10px;"> <tr> <td style="width: 25%;">9:45</td> <td style="width: 25%;">10:00</td> <td style="width: 25%;">11:30</td> <td style="width: 25%;">15:00</td> </tr> <tr> <td>志津川高杉S地区下見</td> <td>Y仮設</td> <td>ミニコンサート・移動カフェ</td> <td>志津川高校 ミーティング</td> </tr> </table>			9:45	10:00	11:30	15:00	志津川高杉S地区下見	Y仮設	ミニコンサート・移動カフェ	志津川高校 ミーティング
9:45	10:00	11:30	15:00							
志津川高杉S地区下見	Y仮設	ミニコンサート・移動カフェ	志津川高校 ミーティング							
活動した上で感じたこと 出発まで時間があつたのでめぐみさんより、「志津川高校近くに10件ほどの仮設がある」と聞いて、下見をするもののそれに当てはまる仮設を見つけることができなかった。その後、延期になっていたY仮設のミニコンサートに併設した移動カフェを行う。Y仮設は色んな所からきている人が多いようで知らない人同士というのが多い様子。また集会所も以前はなかったが、他の団体から「福幸茶論(ふっこうさろん)」というお茶を飲んで話すことのできるいすやテントを提供されていた。その近くでコンサートをする。前予告があつたので約50名ほどの人がカフェを利用し、30名ほどが音楽を楽しんでいた。この演奏者たちも仙台や石巻の出身の学生の方で「少しでも力になれば」とコンサートをすることになった様子。演奏中はウトウトと眠そうにされたり、涙を流したりとそれぞれの聞き方をされていたが、とてもリラックスした雰囲気だった。話をしていくと、以前はいなかったが、自治会の会議が明日あるなどと仮設の中でもどんどん変わってきている様子。今回、移動カフェと演奏会にとっても喜ばれており、今まで何もなかったから次もぜひ来てほしいと言われる。カフェの重要さを強く感じた。 また今日は早くに帰れたので小野寺さんと話したが、手帳を持っていないがアスペルガーの人が知り合いがおり、津波で家族を亡くし、祖父と生活しているとの事。その人の将来が心配と話しておられた。ジョブコーチも近くにはおらず、仕事もしていないがそういう方の支援も今後できればいいのではないかなと思う。										
感じたことを改善・向上させるのに必要なこと ※移動カフェは手段であって、目的ではない。他にも喫茶店を出しているボランティアはいる。私たちはそれから話をして心のケアをしていくのが目的である。										
他へ依頼したこと なし										
備考 明日は、はぐハウス近くのT仮設にてバザーとそれに合わせて移動カフェを行う。 昨日、菊池さん登米拠点に来られる。ここも持ち主の夫婦や工事の人が来て拠点の工事について話す。 壁に板を貼り、そこで塗りなおしをしたり、床もかえるという話。また男子トイレの壁を取り払ってお風呂のプレハブをつけるという話になっているよう。できるだけ早くすると菊池さんは話されていました。										
明日の予定 日浦、粕田、宮本親子: 移動カフェ(T仮設にて) 栗田: 帰阪										

社会福祉法人 そうそうの杜

被災地ボランティア報告

宮本 直子

活動日：8月20日～24日

活動場所：登米拠点～南三陸町(志津川近辺田尻畑、歌津地区仮設)

活動内容：移動カフェ、仮設訪問、志津川高校避難所撤去作業

(感想)

東日本大震災より5カ月余り…初めて被災地に向かった。これまでの話しから、街はがれきの撤去が進み、復興に向けてずい分変化していると聞いていた。

実際、仙台から登米市辺りの内陸部では道路の亀裂や建物の破損を垣間見る程度で、それよりも節電による街の暗さが地震の跡形を残していた。しかしながら、志津川湾岸地域の南三陸町では「町がすっぽりなくなった。」との声を実感し、強烈な衝撃とともに震災の規模を目の当たりにした。

志津川高校から程近いところにある田尻畑では、他地区から仮設住宅に移住した人と、もともとの住民とのコミュニケーションを図るためにオープンカフェを設けた。ここでは住民の方が互いに積極的に声を掛け合い、今後の暮らしを前向きに捉えていこうといった姿勢を、僅かながらにも感じる事ができた。近隣の人と気持ちを共有し、心を整理しながら次の行動を模索しているかのようなようだった。ただ、身体的に不自由のある人、現状では高齢者などが活動や情報が遮断される中での生活に心理的影響が大きく、他者の歩みよりがより近くまで必要だと感じた。また、日頃からコミュニケーションが苦手とする方にも、私たちの見えないところで不安を抱えて生活されているのかなと思った。

仮設住宅での暮らしが日常化し始め、そのニーズも地域性や仮設の規模から異なり、今後も変化していくと考えられる。自治会長のリーダーシップ、仮設ごとの談話室の有無、行政の介入などからもすでに違いが見られた。

話しを個々に伺うと、経済基盤となる仕事に就いているかそうでないかが生活を大きく左右し、その方の表情にも表れていた。最近のニュースでは被災地の雇用率が上昇しているようだが、アリーナに常設された職業相談所の求人は、がれきの撤去を主とした土木作業員を始め、そのほとんどが短期契約社員といった不安定なものばかりだった。これまで漁業に携わり生計を立てていた人々が船を失い、養殖場を流され、失意のどん底に落ちてまた海を相手に仕事をしていく決意を固めておられた。私達都会の人間とは違い、自然と共存している方々の受容と柔軟な強さを感じた。

今回被災地を訪れ、人が支え合っていくことの大切さを痛感した。家族であり、隣近所であり、町内会であり、地域であり、そして組織・自治体・国といったそれぞれにできることがあり、やるべきことをやり続けていくことが復興への道のりを歩んでいくことだと思う。

被災地を訪れる前に、「被災者の心に寄り添う」ケアが私にできるのかと不安を抱いてい

た。被災された方の話しにじっくり耳を傾けることで、ご本人が思いを口に出すことから気持ちを整理され、少しでも前に進むための手助けになるのかと思う。そしてそれは、真摯に向き合うことで第3者であっても構わないということ、また被災者同士ではお互いを思いやるあまり自分の気持ちを吐き出せず、第3者の方が都合いいこともあるんだと理解した。

私達にできること、私達にしかできないことがまだまだたくさんあって、そのニーズを掴んでいく必要がある。

がれきの撤去や仮設住宅の入居など物質的な復興が進む中、被災された人々の心の復興は始まったばかりだと感じた。



東日本大震災派遣 報告書

日時：平成 23 年 8 月 22 日（日）	天気：雨	報告者：宮本・日浦・初田														
活動内容																
<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 16.6%; text-align: center;">10:00</td> <td style="width: 16.6%; text-align: center;">10:45</td> <td style="width: 16.6%; text-align: center;">13:00</td> <td style="width: 16.6%; text-align: center;">13:30</td> <td style="width: 16.6%; text-align: center;">15:00</td> <td style="width: 16.6%; text-align: center;">15:30</td> <td style="width: 16.6%; text-align: center;">17:00</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">志津川高校T仮設 調査</td> <td style="text-align: center;">N仮設 調査</td> <td style="text-align: center;">N仮設 調査</td> <td style="text-align: center;">ボランティア ミーティング</td> <td style="text-align: center;">つつみさんと 今後の動き打ち合わせ</td> <td style="text-align: center;">小野寺さん、市従さんと 明日の打ち合わせ</td> <td></td> </tr> </table>			10:00	10:45	13:00	13:30	15:00	15:30	17:00	志津川高校T仮設 調査	N仮設 調査	N仮設 調査	ボランティア ミーティング	つつみさんと 今後の動き打ち合わせ	小野寺さん、市従さんと 明日の打ち合わせ	
10:00	10:45	13:00	13:30	15:00	15:30	17:00										
志津川高校T仮設 調査	N仮設 調査	N仮設 調査	ボランティア ミーティング	つつみさんと 今後の動き打ち合わせ	小野寺さん、市従さんと 明日の打ち合わせ											
活動した上で感じたこと																
朝から雨のため、カフェはできず終日調査。U地区を午前1箇所、午後2箇所訪問する。もともと同じ地域でまとまって入った世帯が多かったが、若年者は外出し残っているのは高齢者が多い。高齢者は90代だが今回の地震や津波でも今無事なのは、年齢のわりにとってもお元気。家族に大事にされているが故に、山間部なので坂が多いのであまり外を出歩かないように、と言われ仮設内でじっと過ごしている。訪問し話を終えた後、「やっぱり話をするのはいい。気持ちはずっとする」と言っていた。また、孫の代までと思いい家を購入し、貝の養殖業も廃業し今後も海に関する仕事にはつけない、今は何もないと話す家族も。仮設内で自治会長を中心に住人で、自分たちで集まり話をする懇談会を発足させたばかりで、心のケアをして欲しい、そういう外部からの参加は歓迎すると言われ24日(水)9:30～11:30までその懇談会に合わせ、カフェをする予定(堤さん参加)。その時、今後の動きや方向性を決めていく。 ほとんどの会合の人が初めは「仮設に入り、屋根があり幸せ。大丈夫」と言うが話をしていると徐々に「しんどいわ」という言葉が出てくる。その人からその人の言葉が出てくるのは本当に時間がある。一人ひとり、時間を一緒に過ごす中で話したい人、言葉は多く交わさなくても少しの間、側にいて欲しい人など、本当に様々。家族がいる人、いない人との大きな違い。																
感じたことを改善・向上させるのに必要なこと																
難しいことだが、とにかくなるべくゆっくりと話を聞くこと。家族同士ではきつと言えていないんだな、と思われることも出てくることもある。ゆくゆくは、その地域で生活している人たちが協力しあうことになるだろうから、近所同士もつながりを持ってもらうようなコミュニティ作りのきっかけとして、カフェの継続性と必要性の再認識。																
他へ依頼したこと																
なし																
備考																
志津川高校避難所、本日で撤退。しばらくは後片付け、掃除のボランティアは少数残る。明日からは朝の集合場所はハグはうすの拠点。 避難所ではなかなか生活して出来なかった障害者が、仮設入居が始まり地元に戻ってくることもあるだろうから、随時仮設を訪問し情報を集めていく。 小野寺さん：震災当日の状況を細かく話してくれる。壮絶な状況だったと知る。																
明日の予定																
初田、加島友愛会Tさん、市従さん一人(?)：志津川高校周辺の仮設訪問調査。 市従さん二人：Sさん宅に飲料配達。 日浦・宮本親子：帰阪																

社会福祉法人 そうそうの杜

被災地ボランティア報告

梶田花恵

・日程：平成23年8月20日～27日

「草が生えてきている・・・」と、南三陸町の町を見て、少し驚きがあった。町ごと流した波をかぶった土地は、ある程度瓦礫が整理され、前回4月後半から訪れた南三陸町の光景とは違ってきている。しかし、瓦礫撤去はしているものの、なくなっているわけではない。瓦礫は瓦礫、車は車と分け、あくまで整理している段階。周辺に匂いはほとんどしなかったが、砂埃が舞っている場所があったり、道路の整備がまだでボコボコだったり、訪れたある仮設では蠅が飛び交っていた。

8月22日で志津川高校の避難所は閉鎖。避難所にいた人たちは何とか、仮設住宅へ入居できていた。しかし、仮設での生活は見せてもらった私でも（狭い。部屋内の段差が多い）などすぐに思ったので、入居している人たちは不便な生活を強いられている。また、仮設は今まで人の住んでいなかった高い土地、山を切り崩して作られているので、周辺の道はとにかく急斜面。玄関を出ると砂利道なので「手押し車をもらったが、使うことができない」と高齢者は言っていた。だから、高齢者はほとんど部屋から外に出ることもできず、何とか歩ける人は仮設内で顔見知りのご近所さんと会うことができるが、支えが必要でまた、遠くの場所から入居してきたので誰かが訪問しない限り、一日誰とも会うことがないという人もいる。

他の仮設でも山を越えないと店や病院などもないので、知り合いに頼み何とか凌いでいる人もいる。仮設を建てるのに色々な業者が入っているので、形態も全く違う。抽選で当たった所にとりあえず入居しているので、一人住まいだが二間あったり二人住まいなのに4畳半一間だったり、差も大きい。部屋の前のスロープを見て、（もしかしたら障害を持っている人がいるかもしれない）と思い訪ねると、「私たちには必要ないのですけどね」と言っていた若い親子もいた。

今まで共に暮らしてきた近所の人とも離れてしまい、震災後からの不安に合わせて今後の生活への不安も抱えている。気持ち、心がしんどくなり自分から周囲の人とのつながりを持とうとする力がまだ出てこない人もいる。

今回は、まだ自治会ができていない仮設や色々な地区から集まってきた人が多くまだ隣近所にどういう人が住んでいるのか分からない仮設を中心に回り移動カフェをして、顔つなぎのお手伝いという目的にしている活動の継続。そして障害を持っていて、今までの生活が継続できない、できにくい人への支援や現地で支援できる場所へつなげていく活動。しかし、雨が続きカフェをする場所がない日が多かったので、仮設の一軒一軒を訪ね、話を聞くという活動が多かった。ほとんどの会う人は「ありがたいこと。仮設に入れて。そして遠いところからも色んな人が来てくれて」と話すが、次第に津波に遭ったこと、そのときの状況、そして家族や知っている人、家、仕事など大切なそれらの財産を失ったことを話し始める人も少なくなかった。ゆっくりと、言葉が途切れることもありながら話をす

る。「みんな、大変だから……。うちはまだいい方だから……」と言うが、心は傷つき辛い思いをしている。カフェという場で知り合った人との話では、周囲にも同じ被災した人がいるという部分で皆でその話を共有し共感しあえ、(私も話してみようかな)ときっかけになるような状況だが、一人一人と話をしたら、また違った内容になっていたのではな
いか、と思う。

知的障害、身体障害を持つ人や家族はこれから始まる仮設での生活に大きな不安を抱えている。今は、高齢者や障害者の入所施設での避難生活やS・Sが続けている。施設が避難所としての役割を終える日ぎりぎりまでそこで生活するようだが、そこからは仮設での生活になる。精神障害者は環境が変わり、調子を崩す人もいる。たまたま訪問したお宅で「たぶん、ちょっと障害っていうか違った感じがある人がいるんだけど、私たちもまだこの辺がよく分からないから……。気にはなっているんだけど。お姉さんから声、かけてみてあげて」と、障害者支援をしていることを自己紹介したときに教えてくれた人がいた。なかなかすぐには目に見えて分かりにくい精神障害者は、自分から声をあげることも難しいだろう。自治会の発足、その後の動き、そして支援機関だけでなくできるだけ隣近所、近場の人たちとのつながりを持つことが必要になってくるだろう。そこに住んでいる人たちの力がわいてくるまで、私たちの支援は息長く続けるべきだと思う。

鈴木さんや小野寺さん、被災しながらも町や住民を思い活動を続けている人たちへの支援も、間接的に延いては地域の支援になっていく。

時間の経過とともに、町の様子や人の生活など目に見えるものは少しずつ形を変えている。しかし、人の心の傷はそうではないだろう。今まで築き上げてきたあらゆるものがなくなり、そしてこれからまた作っていくのだが、そういった作っていく力は人の心や気持ちの力。今回出会った、堤さんや恵さん、のぶちゃんたちの人を感じる力、信じる力にも感動した。三人と話をしている、現地の人たちの表情や様子、気持ちが徐々に柔らかくなっていくのを見て、出会いが人や色々なものを変えていくのを見て、言葉にならないものを感じた。今だから聞いてほしい、少しでいいから側にいてほしい、という人が沢山いる。「いいんだよ、それで」とただ頷いてくれたら安心できる人も沢山いる。自然災害だから怒りや悲しみ、辛さや苦しみをどこにぶつけたらいいのか分からない。出会った3人は、そういう気持ちをその人自身が受け止め、「また生きていこう」と思うきっかけを、ほんの少しでもきっかけになる部分を支援していつている。それは、状況は違っても私たちが日々しようとしている支援だと思った。

今後は、

- ・障害者へはもともと利用していた支援機関が今までに近い支援が出来る状況になるまでのつなぎとして私たちが支援活動をしたり、また機能してきている機関への引継ぎや横のつながりへの手伝いの継続。
- ・仮設という新しい生活が始まり、地域のつながりを持つことへのきっかけ作りの継続。
- ・社協から生活支援員が派遣されるようになってきているので、私たちが出会った人たち

の情報を共有していくこと。

・仮設で生活をしている人たちの状況や情報を整理していき、たすけっと、HUG ハウス、そうそうの杜、小野寺さんや鈴木さんたちのように地域力になる人たち（行政はまだあてにならないので、どんどん声を出してくれる人たち）と情報の共有。（障害者だけでなく、一人暮らしの高齢者の状況もなるべく把握しておいた方がよいと思われるが、莫大な量になってくると思う・・・）

東日本大震災派遣 報告書

日時：平成 23 年 8 月 24 日（水）	天気：曇り	報告者：柊田
活動内容		
8:50 ベイスайдアリーナ 集合	9:30 N仮設 カフェ	11:30 カフェ終了
14:00 W仮設訪問調査	17:00 恵さんたちと	17:30 小野寺さんと 明日の打ち合わせ明日の打ち合わせ
活動した上で感じたこと		
以前から予定していた、N仮設での住民の懇談会にカフェを入れてもらう。皆さんと顔合わせ。私たちが来ることを聞いていた人、そうでない人がいて初めは少し緊張した雰囲気だったが、徐々に柔らかい雰囲気になる。参加者は30人ほどで殆どが高齢の女性。皆、膝が痛いので足を伸ばして座っている。元々同じ地区で生活していたので、顔つながりがある。家も仕事も家族も流された人が多い。3、4人が固まって話をし、私たちが一人に話しかけると隣の人も「うちもね・・・」と参加してくる。話題はほとんどが震災のこと。知っている人がいるから初対面の私たちに話しやすかったこともあるだろうが、今後は逆に個人的に話をしたいと思うようになるかもしれない。自治会長とも、状況に応じて個室のようにしきりを作っていっても良いかもしれない、と今後の予定などを話すときに話題になる。ただ、毎週水曜日の9:30～11:30まで行われる懇談会に毎回カフェが参加するのは、人員や動きなどこちら側がしんどくなるかもしれないので、隔週にするなど、堤さんが自治会長と調整を図っていく。自治会長は、いつもはあまり見られない笑顔が住民から見られたので、今後も継続して参加して欲しいとのこと。 午後は堤さんからの依頼で登米市内にある、W仮設に荷物の搬送を兼ねて訪問調査。出会った中年女性から車椅子の孫がいるお宅を聞き訪問。自宅にあがらせて貰い話を聞くが、来月からその孫と一緒に生活するとのことと本人には会えず。仮設が建つ前から行政に細かく室内のバリアフリーをお願いしていたのに、出来上がった車椅子では不便な幅や大きさに仕上がっていたので、今後不安がある様子。たすけっとのことを話し何かあれば連絡して欲しい、と伝える。→母親は小野寺さんの同級生だったので、つながりはあると後で分かる。		
感じたことを改善・向上させるのに必要なこと		
皆が同じ大変な思いをしているから、一人ひとりが抱えているしんどさを話す場所や機会が少ない。堤さんや恵さん中心に、今後も出来るだけゆとりと話を聞いていく時間を作っていく。自治会が出来ている仮設はまだ少ない。つながりを持ってもらう、きっかけ作りを継続して行っていく。		
他へ依頼したこと		
なし		
備考		
なし		
明日の予定		
小野寺さん、恵さん、休み。 山川・柊田・加島友愛会（Yさん）、市従・加島友愛会（Tさん）：以前、恵さんやそうそうの杜スタッフが出会った障害者を再度訪問しゆとりと出会い話を聞く。		

社会福祉法人 そうそうの杜

東日本大震災派遣のレポート（2011.08.24～31）

山川真司

今回 8 日間のボランティアに行って、まず感じたことはテレビ・写真やいろいろな方の話から情報としては想像していて分かっていると思っていましたが、南三陸町に入り街の現状を見た時に、全く違う感覚になり言葉を失い得体の知れない感覚に陥り身震いして鳥肌が立ち少しの間動けない状態でした。そんな形で何とか今まで動いている方について周り活動し、行くまでは焦らずじっくり現在の状況を把握して、と考えていたのですが、「何かやらなければ、どうにかして動かなければ」、などといつもと違う感情が出てきて消えませんでした。

考えるのでなく、感情が湧き出るような感覚でした。頭では被災地のペースがあり現地の方の動きのフォローをと考えているのだが、つい無理な動きをしている現状があり、中々現地の方を中心にしていくことが出来なかった。

自分たちは、個人的にはたった 1 週間だから多少無理をしても動けるのだがこれから、ずっと活動しなければいけない方たちの事を考えて一つずつ積み上げて行く事を改めておこなっていかないとようやく帰る頃に落ち着いて考えられるようになりました。

今まで行った方たちが、口々に短かった、もう少し日にちがあればと言われていた事も思い出し、やはり自分もそう思ってしまいました。頭ではこれが一ヶ月だろうと 3 ヶ月だろうと一時的なボランティアである以上は多分変わらないだろうとは分かっているのだが、どうしてもそう考えてしまう。

その為にも普段やっていることを改めてもっとしっかりやっていかなければいけないとも考えます。

ただ、今回のボランティアでは本当に「ゆとり」と言うものを持っていなければ話を聞く事もままならない事、考える事、行動する事も的確な判断も出来ないことを改めて学びました。

今回のボランティア活動で感じたことや得たことを、これからの生活支援の中でも忘れず役立てていけるようにします。

ただ、またボランティアとして現地へ行き活動できるのならば是非よろしく願います。

東日本大震災派遣 報告書

日時：平成 23 年 8 月 27 日（土）	天気：晴れ	報告者：山川
活動内容		
8:50 登米市役所 初田送り 10:00 Sさんレスパイト 13:00 I 公民館前 カフェ 16:00 N仮設 堤さんと訪問 立ち助くんという物を見せてもらう。 17:00 登米拠点到着 打ち合わせ		
活動した上で感じたこと		
Sのレスパイトで感じたことは、これからまだまだ色々な体験を通して成長していくのだろうな、今日は今までは車から降りても2～3歩しか歩かないですぐに車に戻ってしまう、滝がある所にも1度しか行ったことがないとの事でしたが今日は公園に行きそこで時間いっぱいすごされました。本当に楽しそうに過ごされていました。いつもよりも人数が多く楽しかったこともあると思いますが、他にも何かいつもと違うことをSさんが感じたのだと考えます。更に後で分かったのですが、おもちゃ図書館にも来られており、楽しく過ごされていたのでいつも来られていると思っていたのだがはじめて来られていたと小野寺さんより聞き今日だけで新しいことを幾つも体験していることを感じ人との出会いでの成長があるのだと再度考える。 元々明日はまた晴れるので、出来るときに少しでもカフェをして行こうと考えて恵さんと話をしていたのだが、ベイサイドアリーナで復興市があり、おもちゃ図書館も東京からのボランティアも10人ほど来られてテントを出してやっていると小野寺さんより今日以上に障がい者の親子が来られるし、そこでしっかり情報収集していこうと言って下さり、自分たちが進めていくことを改めて考えさせられた。自分たちはカフェをしに来ているのではないんだから、その時その時で何をすべきかの方法は変わっていくんだと……。 また、カフェで昨日ご案内させていただいた高齢者の方はもちろんのこと、今日は土曜日でおいちゃんとおばあちゃんとお母さんとお孫さんで来られておいちゃんが沢山津波のことや漁師だったことで今も仲間で養殖の再開していく事を話していたし、今回日本全国、いや世界中の方たちに助けをもらって本当に感謝して仲間たちと今度どこかで何かが起きたらおらが率先して行こうな！と話していたんだ。と話されながら笑顔だが泣かれていて今日お会いでき話を聞けてよかったと感じた。		
感じたことを改善・向上させるのに必要なこと		
今日のカフェでは、昨日ご案内させていただいた方はあまり来られず、再度訪問を兼ねて案内をして廻り昨日まで何度か訪問しても会えなかった方たち数人と出会え案内することで話もしやすかったのも、土日（休日）のカフェを早目に企画して進めていくことが必要で、カフェをする当日の訪問を兼ねた案内は有効的だと考え必要だと考える。（今回のように平日だとおいちゃん達男性は来られない気がする。）		
他へ依頼したこと		
なし		
備考		
Sさんのレスパイトについて日程は毎週土曜日の10時から12時 基本的に行き先は、三滝堂（ふれあい公園）・平成の森・モクモクランド（津山の道の駅）の3ヶ所で回しているとの事。当初の出会いと違うのはトイレについては、一緒に行こうと言って行くと行かれること。 今回は三滝堂（ふれあい公園）のみで時間が足りなくなるくらいであった。普段は車から降りてもすぐに車に乗ることが多く三滝堂→平成の森（ジュースを飲む）のコースが多いとの事。		
明日の予定		
山川・小野寺さん・加島友愛会2名（Yさん・Tさん）：復興市でおもちゃ図書館の手伝いと合わせて情報収集。 中西・市役所2名：夕方登米拠点入り。		

社会福祉法人 そうそうの杜

東日本大震災ボランティア活動報告

活動期間 8月28日～9月4日

中西 洋平

町には瓦礫が山積みになっており、どこにも行き場所がない状態に見えた。町全体を見回すと復興・復旧は一步一步前進しているように思えた。しかし、人から話を聴いたりして自分の目で確かめると復興・復旧に地域によって各差が出てきているのかなと感じた。避難所も閉鎖され、現在は仮設に移られたが集落ごとに仮設へ移ってきたところはまだ顔見知りの方が多く近所付き合いはあるが、寄せ集めの仮設では隣の人が誰かわかわらい状態でそこで生活していく中で少しでもコミュニティを作っていけたらと思い、自分たちが作るのではなく、地元の人たちが作っていけるようにやっていきたい。

ハグハウスさんと一緒に行動していく中で寄り添うこと、耳を傾けることでその人の思いを受け止めることだと思った。仮設を回らせてもらう中で、たくさんのボランティアや事業者が入っている地域や、高台には建っているが高齢者の方には移動が困難なところなどがあり地域によって様々であった。移動カフェを行いながらその地域にあるニーズや思いなどは地域ごとによって様々で何よりも自分の思いを打ち明ける場所がないと感じた。みんなが集まったところで話が出来ない方もいたりして、マンツーマンになると話して下さったりして、その人にとっての話しやすい場所・場面などもしっかり考えないといけないと感じた。足を運びもっともっとたくさんの人たちと出会うことで大きな組織では拾いきれないニーズを拾い上げて行くことがこれからも大切になってくるのだと思う。いろいろな人と出会うことでそれぞれの思いを汲みあげてそれだけで終わるのではなくしっかり発信をしていかなければならないと思った。

活動期間中にたくさんの人たちと出会う中で、聴くということの重要性を感じた。聴くことでそこからつながるものはたくさんあると思った。人は色々な思いがある中で生活しており、そこに少しでも入りその人がゆとりというものができたらと思い活動をした。話をする中で焦らずその人の思いを聴き、思いを引き出すことの大切さを感じた。これからも継続して活動する中で他機関との連携というものはものすごく重要になってくると思う。それぞれの思いなどもあり、中々うまくいかない時もあるが被災された方のことを思うとみんな同じ思いを持っていると思うので寄り添っていくことで繋がっていくこともあると思う。テレビやニュースでは伝えきれてない人々の思いはまだまだあると思う。小さなことでも拾い上げて一つ一つの積み重ねでより良いものになると思うのでだからこそ継続した支援が必要になってくると感じた。

東日本大震災派遣 報告書

日時: 平成 23 年 8 月 31 日 (火)	天気: 曇り	報告者: 中西								
活動内容										
<table style="width: 100%; margin-top: 10px;"> <tr> <td style="width: 25%; text-align: center;">9:00</td> <td style="width: 25%; text-align: center;">12:00~13:00</td> <td style="width: 25%; text-align: center;">13:30</td> <td style="width: 25%; text-align: center;">17:00</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">N仮設 移動カフェ</td> <td style="text-align: center;">ハグハウスにて打ち合わせ 堤さん・恵さん</td> <td style="text-align: center;">H仮設 ニーズ調査</td> <td style="text-align: center;">登米拠点にて打ち合わせ 小野寺さん</td> </tr> </table>			9:00	12:00~13:00	13:30	17:00	N仮設 移動カフェ	ハグハウスにて打ち合わせ 堤さん・恵さん	H仮設 ニーズ調査	登米拠点にて打ち合わせ 小野寺さん
9:00	12:00~13:00	13:30	17:00							
N仮設 移動カフェ	ハグハウスにて打ち合わせ 堤さん・恵さん	H仮設 ニーズ調査	登米拠点にて打ち合わせ 小野寺さん							
活動した上で感じたこと										
午前はNの仮設へ行き、移動カフェ。何度か訪問しており私達のことを快く受け入れてくれている感じ。集会所でカフェをしながらお話をする。途中から社協の生活支援員6名が仮設に訪問され出会う。生活支援員の方に私達の活動について説明をする。今回は聞く姿勢をとってくれているように感じた。生活支援員によって反応はバラバラで活動していて気づいた。社協の方たちもこれから仮設でカフェを開いていくということなのでお互い連携を取りながらやっていく必要があると思う。そのためにも話をしていくことが大事になっていくと思う。 午後からはH仮設にニーズ調査。ここは集落に囲まれたところにあり、表札もなくわかりづらいところにあった。他の団体なども入っていないように思える。地元の人が中心に入っているが他の地区の方の世帯もある。最近になって入ってきた人が多くまだまだ近所づきあいはないように感じた。カフェを開くことでつながれていけたらいいと思う。 本日ですべての避難所が閉鎖し、新たな生活場所で生活が始まっておりニーズや思いというものが変わってくるのかなと感じた。最近になって仮設に引越してきた人たちはバタバタしているように思う。改めて相手に合わせたペースが必要になってくるのでは。 ハグハウスとの情報の共有ということで今回堤さんと恵さんと話し合いの中で今まではあまり出来ていなかったことお互いの情報を共有することで効率よくそして継続的にやっていけるのではなかと感じた。										
感じたことを改善・向上させるのに必要なこと										
社協の方との話し合いの場。出会った時には自分たちの活動のことを伝え情報の共有を図る。 ハグハウスとの情報共有のためヤフーのIDを取得。今後はそのIDを使って情報の共有化を図ってみる。										
他へ依頼したこと										
特になし										
備考										
被災地障害者センターみやぎの日報は小野寺さんが書く。										
明日の予定										
AM: A・H仮設ニーズ調査(中西・Y・T・荒川ゆ・恵) PM: T仮設ミニカフェ 市従2名: 送迎・仮設調査 市従1名: 情報整理										

社会福祉法人 そうそうの杜

被災地派遣報告(H23.09.05～12)

～南三陸に咲く花～

高橋 勲

瓦礫は海辺に集められ、2 か月前は瓦礫が散乱していた場所に草が芽生え花も咲いていた…。震災から半年、被災地の変わりゆく様を胸に焼きつけながら大阪に戻る新幹線に乗り込んだ。

9月4日～12日の間、2度目の被災地ボランティア活動に行かせていただいた。6月末の第1期の最後の活動から2カ月が経過し、被災地は少しずつ変化を見せていた。

避難所は閉鎖され、自衛隊は解散、人々の生活は仮設住宅へと移っていた。道路は徐々に整理・舗装され、仮設ではあるがコンビニも数件営業されていた。

今回も「被災地障がい者センターみやぎ」からの活動。ただ前回と異なり、登米市に拠点を移しての活動となり、移動時間は大幅に短縮され時間的なゆとりが出来た。そして新たにHUGハウスとも協働し、仮設の調査・カフェの実施を通じて、被災者の現状の把握と生活ニーズの掘り起こし、心のケアを中心に動いた。

仮設住宅では地上波テレビのアンテナ回線が不通のままの場所もあり、現地の方々は地元の情報の入手に困難を強いられていた。未だ行方不明のままの身内の帰りを信じ、待ち続ける家族。遺体が発見されるたびに上空を旋回するヘリコプター。前回とは違った光景を何度も目にし、その度に胸を打たれ、苦しみの中にも「笑顔で前向きに」と頑張っておられる地元の方々の表情が忘れられない。

ちょうど震災から半年の9月11日も現地で迎えた。その日は何度となく時間（時計）が気になり、震災の時刻14時46分までの間、数え切れないほど「半年前のこの時刻までは、この町はそれまでと変わらない海と山の美しい町だったんだ」と思い返した事か。そして、14時46分、志津川高校避難所で生活していた数名の方々と共にHUGハウスにて追悼の集いを持つ。厳かな空気の中、様々な思いが集う人々の脳裏を巡り、涙が頬をつたう。あの日、あの時、全てが変わった。一瞬にして大切な物をことごとく失い、絶望の淵に立たされた方々。生きる気力も失い、ただ茫然と立ち尽くす方々。当たり前が消えた瞬間。変わり果てた街並み。数分間の黙祷の間に走馬灯のように駆け巡る思い。震災が奪ったものは大きい。しかし、改めて感じたのは、あの大きな震災でさえ、ここ（南三陸）で暮らす人々のところまでは奪えなかったんだということ。様々な方々との出会いを通じて、「それでも生きて行かんと…」といった言葉を何度耳にした事か。震災がもたらした影響の中で、新たに「絆」というものが芽生え、現地に根をはり全国で息づいている。「みなさんのおかげでここまでこれた…」と涙を流して語られる方。全てに感謝し生きる事の素晴らしさを教えられたのは私だけではないだろう。

復旧を望んではない。それは不可能だろう。必要なのは復興である。街の復興、経済

の復興、暮らしの復興、そして人々のこころの復興。それは不可能ではない。震災でも奪われなかった大きな生命の力の根源があそこ（東北）には確かにあった。

「また、必ず帰ってきます」と言い切って東北を後にした。新幹線の中で窓から外を眺めていると、鮮やかに蘇ってきたのは現地の方々の笑顔と涙。胸を突き破り出てきたのは「感謝」。ボランティアに行かせていただいた私が得た物は大きな「感謝」だった。そして、南三陸に咲いた花を思い出し、「また、会いましょう」と繰り返した。

まだまだ時間がかかる東北の復興。わたしたちは続けて行かないといけないと改めて強く感じた。わたしたちが考えている以上に現地の方々は小さな力を必要とされている。これから東北は長くて厳しい冬を迎える。季節の移り変わりと共に変わっていく現地の人々の暮らしを、出来る限りの思いと力で応援させていただきたい。



東日本大震災派遣 報告書

日時: 平成 23 年 9 月 8 日 (木)	天気: 晴れ	報告者: 高橋
活動内容 9:00 仮設調査 ①S仮設(33戸) ②N仮設2(20戸) ③N仮設1(40戸) 12:00 ミニカフェ・調査 H仮設 17:30 めぐみさん・高橋・荒川ゆ・S(加島)・M(加島)		
活動した上で感じたこと		
S仮設は人の気配も少なく、高齢の女性に話を伺う。この仮設は半数ほどが地元の部落出身者とのこと。しかし、自治会はまだ発足しておらず、集会所も敷地内にはなく、仮設下の部落集会所を使用するとの事。 N仮設1、2はベイスайдアリーナを挟むように設置されており、ローソンに近いN1は集会所はなく隣接の既存施設である「Nふれあいセンター」を使用するとの事。この仮設ではスロープ棟はあるが、ほとんどが高齢者である。カフェなどの催しも時折実施されているとの事。N2仮設はベイスайдアリーナの山手に存在し、集会所は存在するもののこちらも自治会は発足していないとのこと。N2では志津川高校の避難所におられた夫婦に話をうかがうことが出来る。これから冬を迎えるにあたって暖房器具の不足があるという(備え付けのエアコンは一部屋しか効かなく、収納がないため荷物が部屋の隅にあることからストーブも怖くて置けない様子)。また、地元の漁師や高齢の方々は入浴時間が長い方が多く(20分～30分は浴槽に浸かっている)、追い炊きできない仮設の風呂ではぬるま湯にはいらないといけなくなるとのこと。(お湯を入れ替えるには生活の資金面で苦しい)できれば給湯器があればとおっしゃられる。そのほか、雪が降ってくるとひさしがない仮設なので心配だとの事。仮設の課題はまだ多く、行政の動きは住民の方には不満にしか映っていないこともうかがう。また、どこの仮設もやはり高台に存在することからバス停までの移動が困難で、雪が降ると出歩くことも出来なくなるだろうとの事。 午後のH仮設では、10名ほどの住民が寄ってくださりカフェを通じて話をうかがう事が出来る。以前に情報のあった手帳をお持ちの方は、〇〇棟に住まわれており、こだわりが強いが笑顔で挨拶などではできるといふ。恐らく自閉症・発達障害の方と思われるが本人には出会えず。中には被災でご主人が行方不明になり、未だ見つかっておらず葬儀だけは執り行ったといわれる方、せめて遺体の一部だけでも帰ってきて欲しいといわれる方がおられ、まだまだ震災・津波の大きさをうかがい知ることができる。最後に一人の方がめぐみさんと抱き合った瞬間嗚咽され「本当は泣きたいんだけど、そんなこと言ったらんねえから」と語られた言葉と姿が胸を打った。被災地の方々は「復興に向けて」と頑張っておられるが、本当は誰もが心の中に押し殺した悲しみを抱えながら生きておられるという現実を見せられたようだった。		
感じたことを改善・向上させるのに必要なこと		
・仮設のひさしについては、行政からの補助もあるとのことではあるが限り行政を利用してもらう。また、RQ東北支部というボランティア団体が住宅改修のボランティアを行っているとの事で必要であれば調整できればと考える。 ・給湯器については風呂バンスをお試して使用してもらうことも検討。 ・被災された方々に寄り添うこと、泣きたいときは泣いてもらい、笑いたければ笑ってもらえるような雰囲気が必要。無理に「笑顔を・・・」と頑張る必要もない。復旧ではなく復興を、街の復興、経済の復興、現地の方々の心の復興が大切。		
他へ依頼したこと		
なし		
備考		
・作業所の再開、特別支援学校の再開で平日の日中は障害者はどこもほとんどおられない。土日を有効に利用するのも1つの策か。 ・つつみさん：昨夜～ハグハウスに戻られ本日より活動。		
明日の予定		
・終日仮設調査、ミニカフェ予定(午後はWさん送迎組と分かれて行動) ＊市従さん:明日午後帰阪 ＊樋口:明日夕方登米着		

社会福祉法人 そうそうの杜

震災地派遣報告

活動期間 9月9日～9月16日

樋口 尚紀

私が被災地にボランティアに行かせて頂いたのは震災から半年が経つ時であった。私が行った時は第2期の活動であった。第1期のボランティア活動にも参加したい気持ちはあったのだが「行ったところでいったい私に何ができるのか」という不安が強く、志願することができず気がつけば第1期の活動が終了してしまった。しかし第1期に行ったスタッフからの話や最初は誰も何をしたいのかなんてわからない状態だということ。それでも我々が行く必要があると聞き考えさせられ、自分自身の中で何度も自問自答した結果やっと被災地に行く決心がつき第2期のボランティア活動に志願した。

「もう」というのか「まだ」というのかあれから半年経ち、被災地では瓦礫の撤去は進み仮設住宅が立ち並ぶが復興にはまだまだ。映像や写真で「津波」を見ていたがいったいどれほどのものがこの町を襲ったのかは実際に現場を訪れてもやはり想像することができない。

1週間という短い期間であったが、私は被災地障がい者センターみやぎとして HUG ハウスとともに仮設調査・移動カフェ(心のケア)の活動にあたった。仮設調査とは言うものの、そこで暮らす被災された方々はいったいどのような気持ちで暮らしていてどのような気持ちで調査に答えてくれるのか。こちらにも目的があって来ているのはもちろんではあるが大阪から来て1週間しかいない見ず知らずの私に何を話して下さるのか不安だった。しかし、そんな不安は1日で吹っ切れた。仮設調査の際に挨拶をすると「こんにちは。ご苦労様。」と笑顔で返して下さる。(私が出会った方々は)訪問すれば話をして下さる方ばかり。現在も苦しい生活を強いられているにもかかわらず「今はみなさんのお世話になっている。それで十分です。」と一言。また、「震災前はあそこで働いていた。でも今は仕事道具も全て流されたから・・・」と笑って話される。特にボランティアと現地の方が協同で炊き出しの片付けをしていて、現地の方が「何かすることはないか？」と手が余ったようで皆に聞くと「生きてるだけで十分」と返され周りも「そうそう」と言い笑っていた時の事は忘れられない。とにかく一言一言が重すぎて返す言葉がない。笑っている分その裏にある気持ちを考えるだけで怖くなる。しかし、そうやって被災地の上に立ち生きていく方々の「強さ」が見られた。

自分の持っていた不安がどれほどちっぽけなものかと思えた。そんな思いを少しでも受け止めることで何か次につながるはず。何か一つ、何か一つの少しだけでも私(達)に出来ることがあればと強く思えた。被災された方の言葉を待つ大切さを身にしみて理解出来た。

復興していくにあたって必要かつ怖いものは「時間」。舗装・整備等の復旧作業を行うには当然必要なもの。ただ、時間とともに震災の記憶が薄れていくという怖さもある。被災された方々は忘れられるものではないが、あの震災の影響を受けず日常生活を営む人々に

としては過去の出来事にしてしまう人もいる。被災された方々はあの日から普通の暮らしが出来ない状態が今も続いていることを忘れてはいけない。ボランティア活動をこの先も続ける必要があることは言うまでもない。また、被災された方々とのつながりは復興を遂げる日までではなくこの先も何らかの形で関わっていけることを望む。

東日本大震災派遣 報告書

日時: 平成 23 年 9 月 12 日 (火)	天気: 晴れ	報告者: 樋口
活動内容 9:30 12:00 17:00 T仮設、Y仮設調査・Sさん宅訪問 (樋口・S・M・はるさん) Wさん送迎(市従) K仮設ミニカフェ(はるさん・S) H仮設Wさん宅訪問(樋口・M) 書類整理(市従) Wさん送迎(市従)		
活動した上で感じたこと 以前出会ったY仮設のSさん宅に訪問するがおばあさんが一人出てこられる。息子と2人で住んでいるとの事。仮設番号も苗字も一致したがSさんはいない。Sさんの名前を出すと知っているよう。話を聞くとSさんは石巻に行ったらしい。またSさんには息子がいるそうだが息子は施設に入っていると話す。詳しい事情も知っているようだが非常にあいまい。関係性等について尋ねてみるも少しズレた答えが返ってきてしまうので結局不明確なまま訪問終了。質問の際は明確な言葉で質問しなければならないと感じた。 午後からはK仮設でミニカフェ(はるさん・S)。仮設に住む方は日中は働きに出て残っているのは3~4人程度。最初は向こうも「やるならどうぞ」という感じであったが開いてみると、仮設に住むEさんが周りの集落から人を呼び込み結果12人も集まったとのこと。その方はカフェ等のことをしにきた人も日中は人が少ないと聞くと帰っていきK仮設でカフェを下のは初めてだと喜んでくれていた。今後は仮設と周りの集落とのコミュニティ作りが出来ればいいかなと感じられた仮設であった。 H仮設Wさん宅訪問(樋口・M)。知り合いの方で障害を持たれている方はいないかをWさんの母親に尋ねる。以下はWさん母の情報。同じH仮設に在るとの事。Kさん30代が父と母との3人で暮らしている。兄が二人いるが両方とも自衛隊で別の所に在る。母はワカメ工場で働いている。父は無職。Kさんは軽度の知的障害?のようで普段はツヤの印刷の職場で働いている(障害者雇用?)震災前は電車で通勤していたが現在は父の送迎。しかし、父親も送迎をしなくてもいいのであれば今すぐにでも働きたいと思っているはず。以上。父親は送迎以外仮設に在るので訪問して直接話を伺いたかったが時間の都合上後日訪問することに。		
感じたことを改善・向上させるのに必要なこと 毎日のことだが情報の共有。そうそうの杜・加島・市従の中でも共有できていないのでハグハウスに情報の提供が出来ないこともしばしば。こちらで確認できることもしていないこともあり動きに無駄が多々あった。		
他へ依頼したこと なし		
備考 9月16日のWさん送迎場所訂正 8:00 M園着 → 8:00 M体育館着		
明日の予定 A仮設ミニカフェ H仮設Kさん宅訪問 市川: 夕方到着 M仮設訪問調査 小野寺さん: 休み		

社会福祉法人 そうそうの杜

今回 2 度目のボランティアと言う事で行かせていただいたが、前回とは状況が随分変わっていた。見るも無残に広がっていた瓦礫の山は大部分が片付けられたただ何もない土地が広がっている。被災された方達は丁度避難所から仮設住宅への移行が済んだ所でとりあえず当面の住む場所だけは確保できたといったところだった。住むところが確保できたと言っても 2 年と言う期限付きであり、仮設に入ったら自立したとみなされ、経済的な支援は何もなくわずかばかりの義援金が入るだけ。仕事もなく先行きが全く見えない中で暮らして行かなければならない被災者の不安は測り知れない。そんな中、私に何が出来るのか、いや何もできない事はわかっているがでも何か自分に出来る事をやらなければと思い考えながら被災地に入った。

現地に入り共に活動させていただいたのがハグハウスという被災された方々の心のケアをされている人たち。仮設を周り、カフェを開いて住民の方と話をしていく中で心のケアをしていく。もちろん私にはそんな事をする力は無く、ハグハウスの方達のお手伝いをしながら仮設に入られている方達の話聞かせていただいた。

現地の人たちから出てくる話の内容は全て今回の災害の話。しかし話を伺った方のほとんどは笑顔で明るく話をしてくださる。その中で「ほんとには元に戻って欲しいけどさ、しょうがないよね。前を向いていくしかないよ」こんな言葉もよく聞かれた。話を聞いて戸惑いながらも私は被災された方達は少しずつ今回の事を受け入れる事が出来るようになってるのかな、少しずつだけど気持ちが前を向き始めているのかなとその時は思ってしまった。

その後のある日、拠点でミーティングをしている時、小野寺さんの体験を聞かせていただく事があった。津波が来た時の様子を事細かに話して下さり聞いていた私は何度もこぼれそうな涙を必死にこらえながら話を聞かせていただいたのだが、小野寺さんは仮設で話を伺った方と同じように明るく笑顔でその当時の様子を話して下さっている。そして話の最後の方で小野寺さんは「私も人の話を聞くと涙が出るんだけど自分の事では泣けないんだよね。何でか分からないけど多分まだ受け入れられてないんだろうね。」と話されその時私は仮設の方達と話をした時の事を思い出し、私はなんて浅はかなんだろうと自分を恥じた。

小野寺さんも他の被災された方も皆受け入れることなんてできてない。これからどうやって生きていけばいいのか全く分からない。でも何とかして生きて行かないといけない。悲しいけど泣いてばかりもいられない。そしてもっともっと私には想像しえない複雑な思いがあり、そんな思いが無意識のうちに感情を閉じ込めてしまっているようにも思えた。

これまでたくさんのボランティア団体が来られているがここに来てどんどん撤退している。しかし本当に被災者の方達を支えて行かなければならないのはこれからなのではない

かと思った。

東日本大震災派遣 報告書

日時: 平成 23 年 9 月 17 日 (土)	天気: くもり	報告者: 市川		
活動内容	10:00	12:00	16:00	17:00
				
活動した上で感じたこと 午前中、前日訪問し気になっていた0さんの再調査のためM仮設に行く。 本人の姪に当たる方にお話を聞くことが出来た。本人さんの名前は〇〇〇〇さん、聴覚障害があり、しゃべることが出来ず手話も出来ないとの事。コミュニケーションはジェスチャーでとっておられ日常生活は問題ないとの事。 震災後は引きこもりがちで高齢であることもあり、体のことや今後のことを気にされている。日中活動の場、あるいは内職でもいいので何か仕事が欲しいとの事。最近出来た I 障害者仮設というところを利用することも検討するとの事だったので、どういうところなのか調査の必要有。 午後からD仮設にてカフェを行う。小さな仮設でほとんどの方が高齢者。今回来られた方の中には94歳の方もおられた。 こちらの仮設でカフェを行うのは3度目ということで親しく声を掛けてくださる方もおられる一方で茶なんか飲んでる暇はねえと言われる方もおられた。最初のほうは人数も少なかったが、時間がたつにつれ参加される方も増え満席に。話の内容は津波のことや今の生活今後の生活の話が多いが皆さん表情明るく、笑い声も多かった。話をすることで気持ちが落ち着いていっているようにも見えた。 結局、予定時間を過ぎてても盛況で終わる気配を見せなかったが、こちらの都合で切り上げる。こちらの仮設でもつき1回程度で定期的に行うことをつげると皆さん楽しみにされている様子だった。普段はほとんど家に閉じこもりつきりで外に出ることは無く、こういう機会があると助かると皆さんはなされていました。				
感じたことを改善・向上させるのに必要なこと 今日のカフェは13:30から行ったが、こちらの習慣ではお茶っことは15時からするらしく、確かに参加する方が増えたのもこの時間だったため、時間の設定もみなおる必要があるかもしれない。しかし、これからの季節暗くなる時間も早くなる上、引き上げる時間も遅くなるので難しい部分もある。 高齢者が多くいる仮設では外に散歩に出たくてもベンチなどの休憩する場所が無いため、億劫になり外出しないというケースも多いと聞く。そういうものを設置することで住民同士のコミュニケーションも増えるように感じる。				
他へ依頼したこと なし				
備考 堤さんより移動カフェのマニュアルをいただきました。FAXしますので新しく来られる方は読んで把握しておいてください。				
明日の予定 9時過ぎより吉野沢仮設にてカフェを行う(堤、恵、S、Jさん、市川、荒川、六田) 午後、I 仮設の調査(市川、六田、荒川)				

社会福祉法人 そうそうの杜

《以下は高校生と小学生の感想》

東北ボランティア感想

濱崎 唯

8月9日

(地域の状況) 女川から石巻あたりまでは、津波やじしんのえいきょうを受けて民家などがドロがついていたり、てっこつが見えていたり海からのゴミなどがさんらんしていた。あとはじばんが1-2mしずんでいたため、しおがまんちょうになると地めんぎりぎりまで水がきていた。家は水圧でひっくりかえっていたりしていた。

(活動内容) 仮設住宅を回って移動カフェを開いてコーヒーやおちゃなどみなさんにのんでもらった。あとは仮設にいたちびっ子にカブトムシをさわらせてもらったり住宅地を一周したりした。

(感じたこと) 震災とうじは、ものすごいひが이었다が今の現状は、ゴミもかたづけられて少しばかりはおちついていたようすだった。

8月10日

(地域の状況) 志津川高校あたりには海から流れてきたゴミやざんがい周辺にさんらんしていた。車がスクラップじょうになっていた。

(活動内容) Y公民館で移動カフェをおこなった。名古屋からきていた、クラシックギターを持ったおじいちゃんと一緒にこうたいでえんそうをした。あとは志津川高校にあるきゅうえんぶつしを近くの保管庫にゆそうした。

(感じたこと) 今日はギターのえんそうをしている時に一人のおばあちゃんの顔を見ていたら、まだ不安そうにしている感じようがなんとなく目を見ていると伝わってくる感じがした。

8月11日

(地域の状況) 今日はH仮設に行った。現状は波がおしよせていたために防波堤がひどく決壊していた。

(活動内容) 今日は仮設住宅へ移動カフェをおこなった。その後、トマトの苗に水やりをした。あとは食料を出し終わったダンボールを解体してゴミ置き場へ持っていった。ちびっ子たちとゲームやAKBの話でもりあがった。

(感じたこと) カフェで出会った津波の被害にあった夫妻の話を聞いて僕はそんな過酷な状況の中で一度は離された二人がまた出逢うことができるなんてすごいと思った。ふつうでは、また逢うかくりつが低いのにこうして逢えることはとても良いことだと思うし、素晴らしいことだと僕は思った。

8 月 12 日

(地域の状況)今日はいろいろ移動はしていないので特になし

(活動内容)今日は志津川高校の仮設の近くでカフェの準備をした。午後からは志津川の仮設の子供たちとバスケットボールなどして楽しんだ。

(感じたこと)今日は子供たちと一緒に遊んだりするのが少し不安だった。だけど何事もなく遊べて良かった。

8 月 13 日

(地域の状況)津波のえいきょうでせんろがなくなっていた。SL などの大きなものが色々ろがっていた。

(活動内容)移動カフェをした。午後からは U 仮設へカフェの予定だったがりょうかいをもらえなかったのでできなかった。

(感じたこと)今日は車の窓の外をながめているとガレキの後片付けをしている人を見て、もし自分の家がこのようなことになったらどうしようか、生きていけるのかが心配になった気分でした。

8 月 14 日

(地域の状況)なし

(活動内容)今日は移動カフェをした。途中スギの花粉にやられてダウンした。

(感じたこと)この一週間を通して勉強した事は、人との関わり方、気遣い、言葉遣い、生活の大変さ、命の大切さ、など色々な事をこの一週間で学んだ。宮城県で出会った沢山のボランティアの人達、仮設で暮らしている人達、小さなちびっ子達、宮城の住民の人達、みんなそれぞれ違った生き方をしているけれど一人一人が僕と同じ人間であって力強く生きているんだと感じた。亡くなったお父さん・お母さん・おじいちゃん・おばあちゃん・子供・生物・全ての者達にすごく淋しく、悲しい気持ちがいっぱいします。色々経験できて良かった。いつの日かまた、東北に行けるなら行き、今回以上のボランティアがしたいです。

8 月 18 日

(大阪に戻ってから思うこと)大阪に帰って改めて色々な所をみつめてるとすごい自分達は贅沢な生活をしてるなあと思った。家に帰ってからもずっと変な気分だった。東北にいたときと大阪にいる時とは、まったくちがう変な世界観がずっとしていて気持ち悪かった。ずっとセンチメンタルな気分だった。

今回初めて行った東北、そこは自分の考えていたところとはまるで違う場所だった。前にも皆が言っていた事とテレビや雑誌で見るものと実際見るのとでは違う。実際見るとまるでCGや映画で破壊された風景であった。それを自分はただ茫然と見ていた。僕はその時自分の心の中が空になった感じがした。もし自分がこんな状態になったらどうなるんだろうと今の自分がこんな状態になったらまず絶望しか考えないのだろうと僕はその景色を見ながら思った。

また、僕が一番困った事は現地に行って被災者の人とどうコミュニケーションをとったらいいいのかまったくわからず初日はただ林さんの言うとおりに動いていました。その日はほとんど何も出来ず少し反省しました。次の日はもう少し自分なりに考え動こうと思いがんばりました。その次の日は「移動カフェ」ということをしており、南三陸町にある志津川高校を拠点に動きました。移動中僕は車の中で「仮設」って何やろう？って考えてました。

そして仮設住宅に着き、移動カフェをやる準備をする前に事前に仮設住宅の一部屋一部屋ずつを訪問しカフェを開いてもいいか許可をもらう。そして許可をもらってカフェを開き仮設に住む人々を呼んだ。今回僕は移動カフェを担当しているめぐみさんにお世話になりました。移動カフェでは仮設から訪れる人々の話を聞きます。初めての仮設訪問のときうまく話をしていたので僕から見て単純にすごいなこの人は、と思いました。どうすればそんなにうまく話せるのだろうと思いました。そしてしばらくして仮設に帰ってきた子どもが来ました。その時僕は今度は子ども・・・余計にどう喋ればいいのかと思いました。すると子供たちは僕と唯に話しかけてきました。「今ポケモンやってる？」と言ってきました。僕は去年までポケモンやってた人間！と思った。その子どもはポケモンが大好きらしく自分が知っているポケモンのことや好きなポケモンのことを話しとてもニコニコした顔でうれしそうに返してくれます。僕はその時間がすごく楽しかったです。

そして一日だけ志津川高校で過ごす日がありました。志津川高校では東大生の人たちもボランティアに来ており志津川の仮設に住む子供たちと遊んでいました。僕と唯もその子供たちと一緒にバスケットボールをしたり、僕は子どもと対一のサッカーをしました。その子どもは将来サッカー選手になる事が夢らしく4年生ですごく元気ですごく上手でした。子供たちはすごく元気で面白いです。仮設に住んでいるみんなが兄弟だったり姉妹のようにすごく明るく仲が良かったです。僕もそれを見てちょっとうらやましいなと思いつつ一緒に過ごしました。

何でかは知らないんですけど僕は黙祷で津波や災害で亡くなられた人々を祈る「テゼの祈り」という事をしました。この「テゼの祈り」という歌を歌ったのですが途中で自分でもよくわからないのですが、目から涙が溢れ少し取り乱してしまいました。今でもなぜあの時泣いたのかは自分でもよくわかりません。ただ一つわかったのが、今までは他の人が死のうがどうしてもよかったけれど今はたとえ見ず知らずの他人が死のうと僕は同じ人間なんだと考えとして思っています。

そして宿でお世話になった「しじゅう」のみなさん、夜はほとんどエロ話しかしないけどでもすごく楽しく明るい人々でした。その日そのことで落ち込んでいる時とかその人々と喋っているといつの間にか自分もテンション MAX になっていっぱい喋っている事がありました。さすがに最後の別れはつらかったけど、同じ大阪なので少し安心しました。そして最終日、最後の移動カフェだというのになかなか場所がとれずちょっと苦戦、でも最後はちゃんと移動カフェを少しの時間だけでも開く事ができました。そしてめぐみさんと別れるときにこれからの意気込みを言い、別れました。

最終日ではないのですが、小野寺さんがお盆休みに入る一日前に車で僕と唯を宿まで送っていただいたとき、この一週間はあまり喋ってないのですが、その日は僕が思っていること、また問いなど良い機会だと思い全て話しました。自分が思っていた返事とは裏腹に意外な事や勉強になる事や、今の自分に必要なことまでみんな言ってくれました。自分がこの東北に来て理解できなかった事やなぞと思ったことなど、、決して学校やテレビなどでは聞けない貴重な時でした。本当に勉強というかどっちかというと自分のためになりました。

本当にありがとうございました。

夏休み新聞

発行者 宮本 実来

被災地・宮城へ

私は8月20日と24日の間

東日本大震災で被災した

宮城県へ行くことになりました。

新幹線に5時間乗り、その後

バスに1時間半乗りました。

バスが走っている道は、こぼこ

で、道路にはひびが入っていました。

それに「復興！にぎわいの町づくり

みんなで頑張ろう」と書かれた

旗などもありました。

1日目は着いたのが夕方だった

ので、何もしてないけど、明日からは

何をするのか、と思ひドキドキした

1日でした。

2日目の朝起きて朝ご飯を

食べていると、グラグラグラとゆれ

たのでテレビをつけると、震度4

の地震がありました。私は3月

11日に大阪でゆれた時より大

きい地震が何回もあるんだな、と思いました。この日はカネを開きました。飲み物を飲んだ。りしなから相手の話を聞いて心のケアをするカネです。午後からはバザーをし

ました。ふとんやタオル、歯ブラシなどを

配りました。その中でもハンカチはほと

んどなくなっていました。たくさんの方の

笑顔が見れて良かったです。

宿舎に帰る時、車の中から外の景色を見

ると、がれきがたくさんあって、私は言葉

が出てきませんでした。このがれきが震災前

のくらしに使われていたんだな、と思うと

何とも言えない気持ちでした。

3日目は仮設住宅を回り、お話を聞きました。

震災後、1週間くらいはほとんど食べ物がなく

ばくたんを落とされたいに町がなくなっ

たと話されていました。仮設住宅に来て何

日ほど経ちました。かきと聞くと「1ヶ月ぐら

と答える方が多かったです。中には「まだ来て

5日目」という方もいました。仮設住宅は

部屋や台所などもせまいけど、避難所よ

りは良いくらいができています」とみなさ

んが言っていました。私はお話を聞いていて、自分が勇気付けられるような気持ちに

なりました。

4日目は朝から帰る準備をして、

バスと新幹線に乗って帰りました。

私はお母さんから宮城県へ行くこ

聞いた時、不安がいっぱいで行くのをため

らっていましたが、だんだん勇気を出して

行って良かったな、と思いました。いろん

なことに感謝する気持ちに気付けたからです。

私達ができることは少ないですが、1日

でも早い復興へ大阪から応援しています。



がれきにくもれた
南三陸町



鉄骨だけが残った
防災庁

骨組みだけの防災庁舎、保存を断念 南三陸、遺族に配慮



東日本大震災の津波で骨組みだけとなった宮城県南三陸町の防災対策庁舎について、佐藤仁町長は20日、近く取り壊す方針を明らかにした。津波の被害と教訓を後世に伝える遺構として一時は保存が検討されたが、33人の町職員が死亡・行方不明となり、遺族からは「つらい記憶がよみがえる」との訴えが相次いでいた。

防災対策庁舎は、海岸近くの高さ約13メートルの3階建ての建物。震災直後、防災無線で避難を呼びかけ続けた町職員の遠藤未希さん（当時24）ら約50人がいた。津波は屋上まで達し、助かったのは鉄柵などにつかまっていた佐藤町長ら10人だけだった。

震災後、大半の建物が流された町の中心部には、赤茶けた鉄骨だけになった同庁舎が残った。学者らからは「津波の悲惨さや職員の献身を後世に語り継ぐためにも、モニュメントとして残すべきだ」という意見があがった。佐藤町長も当初は「大震災を心に残す方法」と、保存に理解を示していた。

だが、死亡した職員の遺族から解体を求める声が相次いだ。8 月には、遺族の一部が「庁舎に職員を集めたのは誤りではなかったのか」と町長の責任を問う公開質問状を提出。庁舎の保存方針の撤回も求めた。

佐藤町長は 20 日、朝日新聞の取材に対し「見るたびにつらい記憶がフラッシュバックする、という遺族の気持ちを尊重する事にした。津波の悲惨さを伝える手段については、別の方法を考えていきたい」と話した。

ビンの『僕のお話を聞いて！』のコーナー No6



その人が誕生日だった日のお話。

心やさしき男性がその人の為にお祝いをしようと思って
大きなまーいケーキと花を持ってその人に渡したんだ。

『お誕生日おめでとう！』ってね。

よほどうれしかったんだろうねえ～。

泣きながら『ありがとう』って受け取ったんだ。

う～～～ん、感動的なワンシーン。

・・・・・・・・・・が、しかし！！

その人はケーキと花を持ってさっさとその場から立ち去ってしまった・・・。

『ええ————！ ケーキかかえて持って行っちゃったよ……。ローソクに火をともしてさあ、

みんなでお祝いしようと思ってたのに・・・・・・・・ ええええ————っ！！！！』

心やさしき男性はもちろん、周りの人もあぜんとしたよ……。なっ……。なんでえええ！！！！

渡されたものはもちろん自分のもの。間違っではない。

……。だけでもね————

その『だけでもね————』ってゆうこの思い。これってなかなか周りの人は

直接言いにくい。そう、面と向かっては言いにくい部分なんだよね。

でも僕はその人に『普通はね、ケーキもらったらお祝いしてみんなで分けて食べるものなんだよ。

それに周りの人に「○月○日、私の誕生日！」って言ってまわるのは小学生じゃあーないんだから

はずかしいし、それにどう返事して良いかわかんないから、

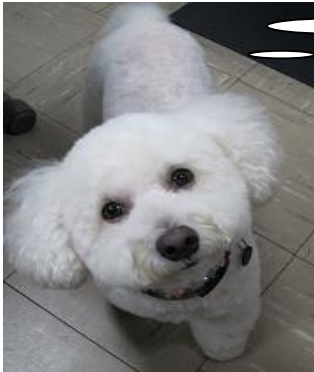
中にはとまどう人も居るんだよ』って言ってあげたの。

ついでに『1個の小さなショートケーキは分けなくても良いんだよ』って念のために付け加えたら

その人は『それくらいのことわかってるよあー』だった。

・・・でもやりかねないからなあ、この人は・・・。

賛助会にご協力お願い致しますっ！



賛助会員の皆様、ご協力いただきましてありがとうございました。
なお、賛助会費を御振込いただく場合は下記の郵便振替口座に
お振込み願います。

一口：2,000円

振込先(加入名):そうそうの杜

口座番号:00940-5-185986

賛助会費（平成 23 年 6 月 6 日～平成 23 年 9 月 7 日にご支援いただいた方）

小澤 温	倉川 晴子	田島 ひとみ	野瀬 文孝	綿谷 陽子
数田 博保	田中 利幸	長谷川 幸子	大谷 眞造	村尾 恵子
渡辺 勇雄	田中 伸幸	横川 よし子	片山 勇哉	椎木 明美
中村 洋子	奥野 正継	岸部 章	関 宏之	濱口 慶子
小野 峰子	金子 末子	宮本 幸子	村津 和雄	原 昌子
原田 博明	原田 文子	北島 太郎	橋本 陽子	三宅 美幸
來山 秀子	渡辺 晴菜	川本 芙美子	藤野 正裕	櫻本 房子
佐伯 一郎	大竹 茂	大竹 利幸	大竹 昂平	華山 匡恵
華山 比良子	村井 長生	濱田 清司	岸本 博	向江 美樹
和田 卓司	橋本 喜義	橋本 千鶴子	橋本 暁子	兼岡 猛
清水 正彦	藤田 昌昭	中島 勝	だいち法律事務所	山本 大助

(敬称略、順不同)

一般寄付（平成 23 年 6 月 6 日～平成 23 年 9 月 7 日にご支援いただいた方）

岡田 朋香	岡田 隼人	尾高 成昭	櫻本 和男	ヤマワキ商店
(株) パアグ	塩本 昌義	辻 吉雄		(敬称略、順不同)

その他、地域の方々に牛乳パックや様々な物品等、ご寄付を頂いておりますことを

心より感謝申し上げます。

【おまけ 高校生たちの活動中の写真です】



社会福祉法人 も り そうそうの杜

大阪市城東区鳴野東3丁目18-5

Tel : 06 - 6965 - 7171 Fax : 06 - 6167 - 2622

ホームページ : <http://www.sou-sou.com> E-mail : sou-sou@gol.com

地域生活支援センターあ・うん 相談支援事業 居宅介護支援事業

とことこと 居宅介護・重度訪問介護・移動支援

住所、連絡先は法人本部と同じ

庵げんげん 生活介護

(主)大阪市城東区中央 1-6-23(庵)

Tel/Fax 06-6935-0909

(従)大阪市城東区蒲生 3-11-10 マサキビル 1F(げんげん)

Tel/Fax 06-6935-1727

伝 児童デイサービス

大阪市城東区蒲生 3-11-10 マサキビル 2F

Tel/Fax 06-6930-6540

創奏座座 就労移行支援・就労継続支援 B 型

(主)大阪市城東区中央 1-7-27(創奏)

Tel/Fax 06-6935-3794

(従)大阪市城東区鳴野西 4-17-23(座座)

Tel/Fax 06-4258-6013

つむぎ館 就労継続支援 B 型

大阪市城東区関目 1-14-21

Tel/Fax 06-6933-7269

今福事業所 就労移行支援・就労継続支援 B 型

大阪市城東区今福西 6-3-8

Tel/Fax 06-6933-0737

想縁綾 ケアホーム

大阪市城東区内3ヶ所

添 短期入所施設

大阪市城東区鳴野西 5-18-13

Tel/Fax 06-6965-1235

大阪市つどいの広場事業 だんだん

大阪市城東区中浜 3-22-9 ラシーヌ中浜 1F

Tel/Fax 06-6961-5505

編集後記

28号での予告通り震災特集号になりました。4月は機会が無かったのですが、今回は現地の子どもと遊ぶこともできました。そしてその笑顔から、子どもが子どもらしい表情で笑っているということがどれだけ大事な事なのか、子どもに笑顔が無いことがどれほど寂しいことなのか教わりました。今回は高校生も一緒に連れて行きました。日浦の感想を読んだ方はわかると思うのですが、スタッフにはできなかったであろうことをやってくれたようです。子どもという彼らは怒るかもしれませんが、ありのままの姿・笑顔を見ていると、人は他人にも、自分にも優しくなれるのではないのでしょうか。今回被災された方々が自分に優しくしても良いかも、と思える笑顔に一日も早く会えることを願います。(は)

